新様似町史

〔第二巻〕

市街地とアポイ岳

1

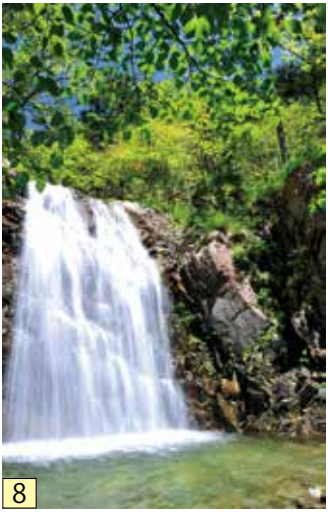
3

4

2

1 アポイ岳山頂付近から様似町を眺望
2 親子岩「夜と朝の間に」
3 夕陽に染まるアポイ岳
4 夕景の親子岩
5 幌満峡「月下の紅」
6 幌満峡「渓谷に咲く」
7 幌満峡「レルゾライトの溪谷」
8 不動の滝「秘められた懐に」
9 アポイ岳とエンルム岬「霧の海とアポイ岳」

5


8

7

6

9

固有種

アポイ山塊（アポイ岳・ピンネシリ・幌満岳）に限って分布している種

ヒダカソウ

エゾコウゾリナ

アポイアザミ

サマニオトギリ

アポイカンバ

固有亜種

基本となる種とは中間系があって連続するが、アポイ山塊に限られる亜種

ヒダカトウヒレン

固有変種

基本となる種が、かんらん岩の影響で、形態的に2～3点の変化・変形をし、アポイ岳に限って分布している変種

サマニユキワリ

アポイアズマギク

アポイツメクサ

アポイヤマブキショウマ

ヒメシラネニンジン

アポイカラマツ

アポイキンバイ

アポイマンテマ

固有品種

基本となる植物（種・亜種・変種）がかんらん岩の影響で形態的に1～2点変化・変形したもので、アポイ山塊に限って分布している品種

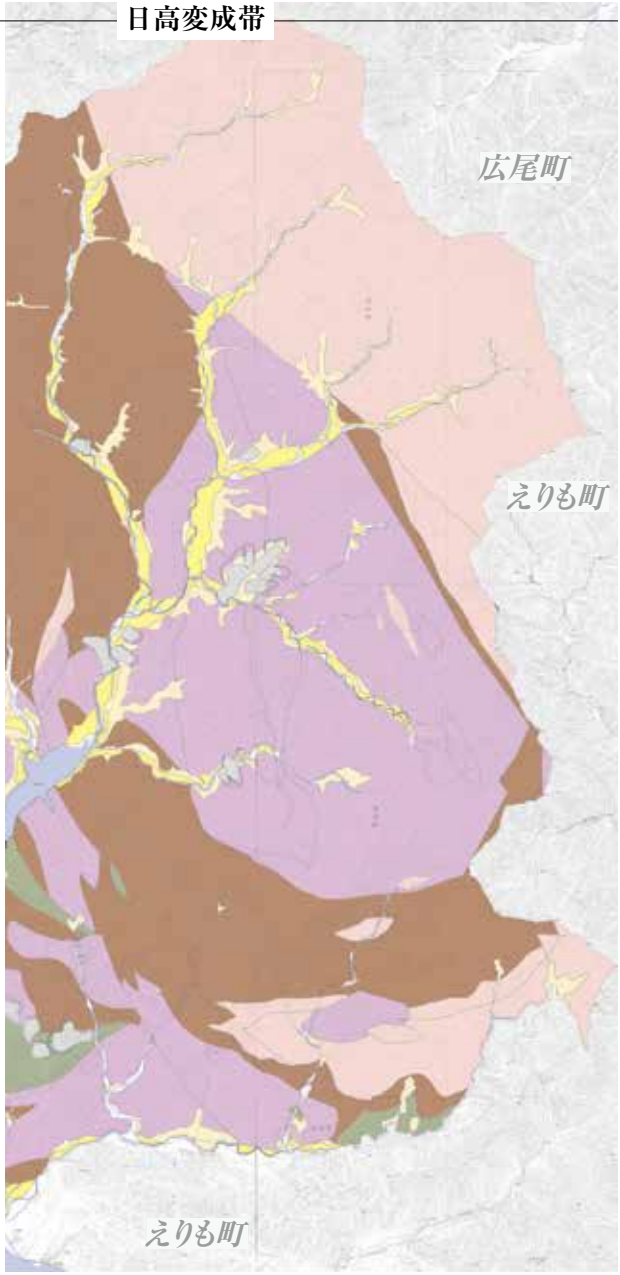
アポイハハコ

アポイクワガタ

エゾノジャニンジン

ヒダカミセバヤ

日高変成帯



- 人工堆積物
- 沖積層
- 砂丘堆積物
- 地すべり堆積物
- 完新世段丘堆積物
- 崖錐・沖積錐・斜面堆積物

（注1）第四紀堆積物

- 河岸段丘堆積物（注2）
- 海成段丘堆積物（注3）

段丘堆積物

- はんれい岩・閃緑岩
- トーナル岩
- 変成岩類
- かんらん岩

地下深くでできた地質

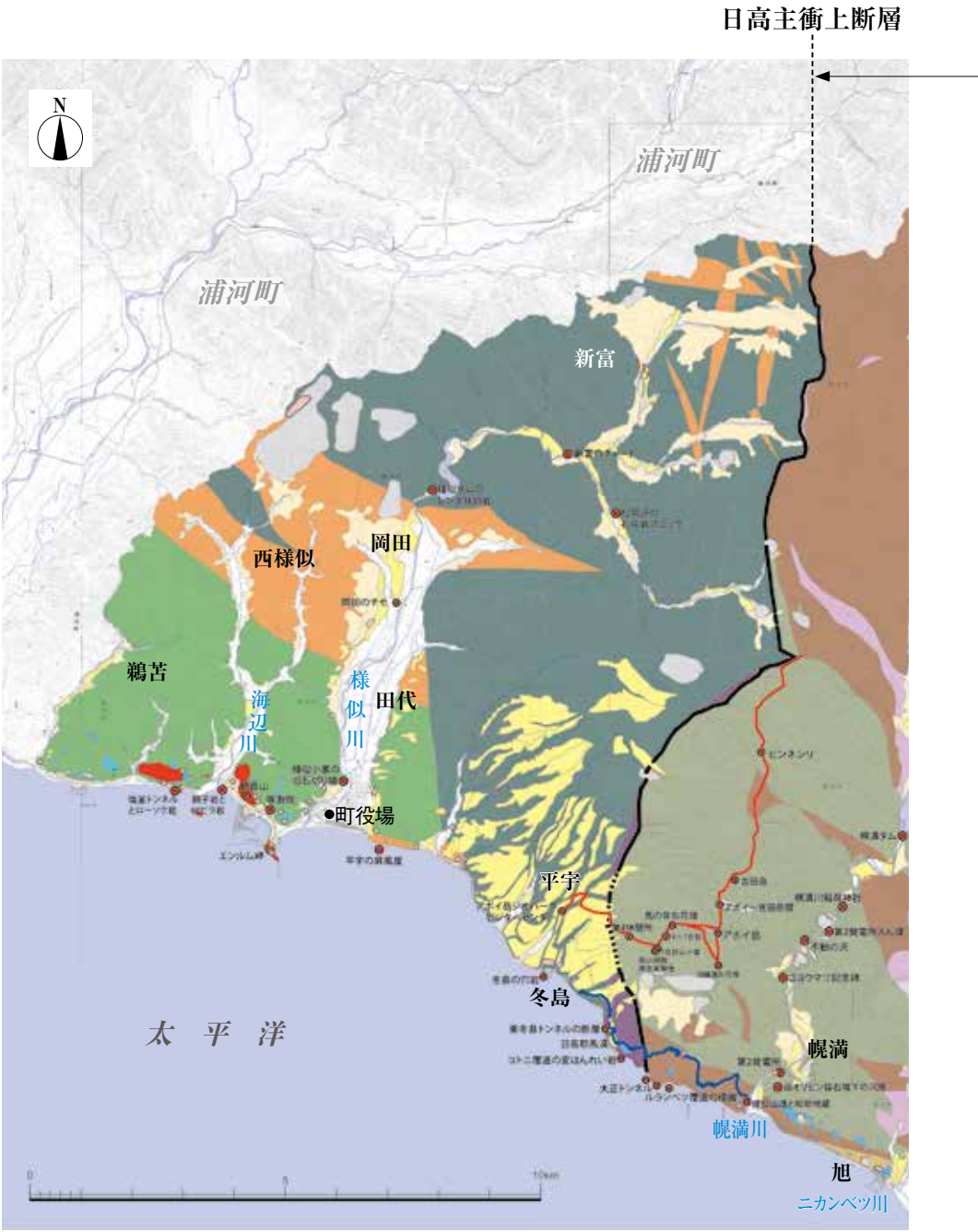
- 堆積岩（注4）（新第三紀）
- 貫入岩類（新第三紀）
- 堆積岩（注5）（古第三紀）
- 堆積岩（注6）（白亜紀）
- 付加体（白亜紀末期～古第三紀）
- 変はんれい岩（変成オフィオライト）

海の中でできた地質

- 断層
- 伏在断層
- かつてのプレート境界（日高主衝上断層）
- アポイ岳登山道
- 様似山道
- 地すべりの滑落崖
- 埋蔵文化財包蔵地

注１：第四紀……258万年前から現在
注２：かつての川の底の上にたまった堆積物
注３：かつての海の渚（なぎさ）の上にたまった堆積物
注４：新第三紀……約2303万年前から約258万年前までの地質時代
注５：古第三紀……約6600万年前から約2303万年前までの地質時代
注６：白亜紀……約1億4500万年前から約6600万年前までの地質時代

様似町の地質図



資料：アポイ岳ジオパーク／北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部地質研究所（平成30年3月23日作成）に地域名等を加筆及び地質図と地質区分を改変

コンブ漁（上の写真３点）

干場いっぱいに広げられたコンブ

サケの定置網漁

サケの漁場へ

ウニ漁

フノリ採り

ツブ貝の加工作業

魚市場での競り

農業・酪農・林業

↑収穫を待つ稲の実り

←特別栽培米「アポイ米」

田植え→

稲刈り↓

いちごハウス団地

いちご栽培

軽種馬（競走馬）の放牧

町有牧野での乳牛の放牧

室内トレーニングセンターでの騎乗訓練

森林組合の施業

バイオマスチップ製造工場

スポーツ

アヒルロードレース

幼児センター運動会

小学生のスケート

幼児センターそり滑り

中学校体育大会・大縄跳び

中学校体育大会・リレー

小学校運動会

中体連バスケット

中体連サッカー

小学生のフットサル

町民テニポンの集い

町民ミニバレーの集い

町民卓球の集い

少年野球大会

町長杯パークゴルフ大会

町長杯ゲートボール大会

ふまねっと（健康体操）

いきいき百歳体操

観衆で埋め尽くされた「アポイの火まつり」会場

アポイの火まつり

エンルム岬に灯された火文字

会場の夜空を彩る花火

アポイねぶたパレード

アポイ太鼓演舞

フラダンス

↖ウニまつり

↑地場産フェアのサケつかみどり

←アポイ大盆踊り

幼児センター稲刈り体験

幼児ジオ学習

幼児センター発表会

小学校稲刈り体験

中学校アポイ登山

子ども会育成連絡協議会キャンプ大会

男性料理教室

学校支援ボランティア

おたっしゃ教室調理実習

クリーン作戦（町内清掃）

様似町女性大会

シャマニ場所絵図面

アイヌ古式舞踊

冬島遺跡の出土遺物
〔撮影＝写真事務所 クリーク 佐藤雅彦〕

等澍院
（上＝本堂、中＝同院に伝わる「等澍院住職記」、下＝百万遍念珠箱〔国重要文化財〕）

住吉神社
（上＝社殿、下左＝棟札、下右＝例大祭神輿）

主な公共施設

スポーツセンター

中央公民館

保健福祉センターきらく

認定こども園様似町立幼児センター

様似郷土館

町立様似図書館

パークゴルフ場（クラブハウス・アポイ）

アポイ山荘

アポイ岳ジオパークビジターセンター

アポイ山麓ファミリーパーク遊具場

アポイの鼓動広場（公民館前）

アポイ山麓ファミリーパークキャンプ場

浦河町
広尾町
パンケ川
幌満川
キリプネイ川
えりも町
オピラルカオマップ川
ピンネシリ
大泉
幌満湖（幌満ダム貯水池）
アポイ岳高山植物群落
幌満ダム
（幌満川第３発電所ダム）
アポイ岳
幌満岳
天狗岳
袴腰山
幌満ゴヨウマツ自生地
336
幌満
幌満川
ニカンベツ川
旭
えりも町
旭漁港
ニカンベツ川

様似町の全体図

資料：国土地理院標準地図をもとに加工

17	総合福祉センター（東様似生活館・様似町商工会）
18	栄町ふれあいセンター
19	ふれあい広場
20	認定こども園様似町立幼児センター
21	生涯スポーツ研修センター
22	様似町役場
23	中央公民館
24	町立様似図書館
25	第２体育館
26	スポーツセンター
27	公営住宅大通第２団地
28	栄町浄水場
29	公営住宅大通第１団地
30	禅輪寺
31	栄町生活館
32	下水終末処理場

1	様似中学校
2	島田歯科医院
3	ジェイ・アール北海道バス様似営業所
4	公営住宅錦町団地
5	特別養護老人ホーム様似ソビラ荘
6	新日本電工㈱日高事業所
7	緑町生活館
8	むつみ会館
9	ひだか東農協様似事業所
10	様似郵便局
11	ファミリー歯科医院
12	様似駐在所
13	保健福祉センターきらく
14	三和医院
15	様似小学校
16	観光案内所

資料：国土地理院標準地図をもとに加工

様似町の市街図

50	観音山公園
51	観音山展望台
52	港町生活館
53	日高中央漁協様似支所
54	公営住宅港町団地
55	ソビラ公園
56	様似港外東防波堤灯台
57	北海道電力様似変電所
58	親子岩ふれ愛ビーチキャンプ場
59	公営住宅西町団地
60	西町生活館

40	住吉神社
41	様似本町郵便局
42	智教寺
43	本町２丁目会館
44	漁村センター
45	エンルム海岸特設会場
46	様似郷土館
47	日高東部消防組合様似支署
48	様似テレビ中継局
49	エンルム岬展望台

33	様似町葬斎場
34	公営住宅栄町団地
35	様似共同墓地
36	野球場
37	観音山スポーツ公園
38	等澍院
39	法敬寺

町の象徴

町の花・ヒダカソウ

町章

町民憲章碑

町の木・日高五葉

役場庁舎

発刊のことば

様似町長
荒木　輝明

このたび、様似町の歴史と文化を著した新しい町史の発刊を迎え、皆さまにごあいさつ申し上げます。

様似町は令和四（二〇二二）年、開基二二〇年・町制施行七〇周年を迎え、その記念事業の一環として『新 様似町史〔第二巻〕』を刊行する運びとなりました。このような記念に際し、本史を発刊することができ、大変うれしく思います。

この『新 様似町史〔第二巻〕』は、約三〇年前の平成五（一九九三）年に発刊された『新 様似町史』の続編として、平成初期から令和の現在までの歩みをまとめたものとなっています。

歴史とは、私たちが生きる土台であり、過去から未来へ受け継がれていくものです。様似町が築かれた土台、その礎（いしずえ）は先人たちの熱意と努力によって固められました。町の発展に尽力されたすべての先人に、心から感謝の意を捧げます。また、町の歴史においては、先住民族であるアイヌの人々も欠かせない存在です。アイヌの深い知恵と文化が、町を豊かに彩りました。アイヌの皆さまにも、深い感謝と尊敬の念を抱いています。

様似町は北海道の太平洋沿岸に位置し、アポイ岳を代表とする豊かな自然に囲まれ、一年を通じて穏やか

な気候に恵まれた町です。平成二十七年には、アポイのかんらん岩や高山植物などの貴重な自然が評価され、「アポイ岳ジオパーク」としてユネスコ世界ジオパークに認定されました。地球の歴史と自然の驚異が交わるこの地は、世界的な価値をもつ存在として認められました。この認定は様似町の宝物であり、未来への遺産でもあります。この自然の恵みを守りながら、未来の世代へ受け継いでいく責任を感じています。

近年、地方の過疎化や超高齢社会の到来など、様似町にも大きな変化が訪れています。また、令和二年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、世界中がこの未曾有（みぞう）の困難に直面する中、様似町もその影響を受け、多くの困難に立ち向かわなければなりませんでした。多くの皆さまが健康や生活に影響を受けて大変な時期を過ごされた中で、『新 様似町史〔第二巻〕』の制作や編さん作業においても予定どおり進行しない状況が続き、発刊が予定よりも遅れることとなりました。

このように、先が見通せず困難な社会情勢の中ではありますが、私が目指す「町民がしあわせと感じられる町づくり」の実現に向け、さらなる取り組みを進めてまいりますので、引き続きの御理解と御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後に、本史の制作に関わった皆さま、そして様似町のすべての町民の方に心から感謝申し上げますとともに、この『新 様似町史〔第二巻〕』が多くの方に読まれ、学術・文化の振興並びに様似町のことをより深く知っていただくための一助となることを祈念し、発刊のことばといたします。

令和五年十月

目次

新様似町史〔第二巻〕

口絵
発刊のことば ◉様似町長 荒木 輝明……〔1〕
凡例……〔28〕

第一編 様似町の全容

第一章 町の概要 2

第一節 位置と面積……2
位置 2
面積 4
第二節 地形……4
1. 地形の概要……4
2. 河川……5
主要河川 6
3. 山地・丘陵……8
日高山脈 9
幌満山地 10
新富山地 10
海辺丘陵 11
様似川低地 12
4. 段丘地形……13
5. 山麓緩斜面及び地すべり地形……14
山麓緩斜面 14

地すべり地形　15
6．海岸部の地形……15
第三節　気　候……19
第四節　町の象徴……24
町　章　24
町　歌　24
町民憲章　26
町の木・町の花　27

第二章　町の沿革――開町～昭和末期　29
近代以前のシヤマニ　29
様似村の誕生　30
開拓による農業の発展　31
社会基盤や施設の整備　32
新しい自治と様似町　33

第三章　人口と土地利用　35
第一節　人口の推移……35
人口動態　35
五歳階層別人口の推移　37
第二節　土地利用……41

第二編 自然と人々の営み

第一章 地質 44

第一節 地質の概要……44
東西で大きく異なる地質 44
日高変成帯の地質（日高主衝上断層の東側の地質） 48
日高主衝上断層の西側の地質 49
第二節 地質から見たアポイ岳ジオパーク 51
1. 幌満かんらん岩体の成り立ちと学術的価値……52
2. 五つのエリアと地質学的に注目すべきジオサイト……55
A 幌満峡エリア―かんらん岩がつくる峡谷 55
B アポイ岳エリア―かんらん岩のスケールを感じる登山ルート 56
C 様似海岸エリア―白亜紀の堆積岩層と貫入岩がつくる景観 57
D 日高耶馬溪エリア―かつてのプレート衝突現場 58
E 新富エリア―はるか南の海からやってきた岩石 60

第二章 動植物 62

第一節 動物……62

哺乳類　62
鳥　類　64
昆　虫　65
その他　66

第二節　植　物……67
様似地域の植生　67
アポイ岳の高山植物群　69
アポイ山塊の固有種　72
高山植物群落の衰退　74

第三節　その他海藻類――ミツイシコンブを中心に　76
藻場の主要種ミツイシコンブ　76
ミツイシコンブの生息域と生態　76
アポイ岳とコンブの因果関係　78

第三章　様似のアイヌ民族　79

第一節　先史時代のアイヌ民族と様似……80
1．北海道の先史とアイヌ……80
アイヌ民族の概要　80
北海道の時代区分とアイヌ民族の先祖　82
「アイヌ文化」の形成　84
2．先史時代の様似……86
様似の遺跡　86
様似アイヌのルーツ　87

第二節　様似アイヌの言語と文化……90
北海道各地のアイヌ語と様似のアイヌ語　90
「様似」の語源　92
様似町内の地名　97
アポイ岳とアイヌ民族　99
様似町におけるアイヌ文化の記録　101

第三節　歴史的史料における様似アイヌ　105
1．近世のアイヌ民族……105
様似アイヌと和人　105
様似アイヌと和人との接触　107
隠れキリシタンとアイヌ語地名　108
江戸時代の様似アイヌ　112
松浦武四郎の見た様似アイヌ　115
2．近代の様似アイヌ……117

近代のアイヌ民族　117
「北海道旧土人保護法」以降のアイヌ民族　121
北海道立岡田尋常小学校　122
アイヌ民族の地域運動　123

第四節　戦後のアイヌ民族の活動……124

1．様似の活動状況……124
北海道アイヌ協会様似支部の発足　124
北海道ウタリ協会様似支部の再建　125
カムイチャシ記念碑の建立　127
様似民族文化保存会の活動　130
アイヌ墓地改葬事業とイチャルパ　133

2．積極的な文化活動……135
「アイヌ文化振興法」の成立　135
台湾原住民族との交流　136
様似アイヌ語教室の活動　137
チセの建設　139

3．二十一世紀の動向……140
アイヌ民族は先住民族　140
「ウタリ」から「アイヌ」へ　143

第五節　様似町のアイヌ施策……144
生活館の設置・運営　144
生活館活動推進事業　145
生活相談員の配置　147
アイヌ農林漁業対策　148
住宅改良資金対策　150
ジオパーク活動におけるアイヌ文化　150
アイヌ政策推進交付金制度　152

第四章　ジオパーク認定とその後の活動　154

第一節　ジオパークプログラムへの挑戦……154
アポイ岳でまちづくり　154
「ジオパーク」認定プログラムの確立　156

第二節　日本ジオパーク認定への道……158
挑戦の始まり　158
日本ジオパーク加盟認定　161

第三節　世界ジオパーク「アポイ岳ジオパーク」の誕生……164

日本ジオパーク認定後の動き　164
世界の壁　166
二度目の挑戦　169
世界ジオパーク加盟認定に向けて　171
念願の世界ジオパーク加盟認定　173

第四節　アポイ岳ジオパークの活動……175
活動の前提　175
主な活動状況　178
各種団体・機関の活動　181
アポイ岳ジオパークビジターセンター　183

第三編　自治・行政

第一章　行政　186

第一節　執行機関……186
町　長　186
助役（副町長）・収入役　187

第二節　行政委員会・行政委員……188
公平委員会　189
選挙管理委員会　189
監査委員　190
農業委員会　191
教育委員会　195
固定資産評価審査委員会　196

第三節　各種まちづくり計画・施策……197
1．総合計画……197
平成以前の様似町総合振興計画　197
第六次様似町総合振興計画の策定　198

第七次様似町総合計画 200
第八次様似町総合計画 202
2. 行財政改革 …… 205
行財政運営の再構築 205
3. 男女共同参画 …… 211
男女共同参画をめぐる動き 211
様似町男女共同参画基本計画 213
4. 様似町まち・ひと・しごと創生総合戦略 …… 217
5. その他の施策 …… 219
「平成の大合併」と様似町 219
様似町土地開発公社の解散 221
地域おこし協力隊員の委嘱 222
北海道様似町東京事務所の設置 224
ふるさと様似応援寄附金（ふるさと納税） 225
企業版ふるさと納税（地方創生応援税制） 228
第四節 交流事業等 …… 230
1. 地域交流 …… 230
友好姉妹町村「新潟県味方村」 230
友好姉妹町村「岩手県野田村」 233
韓国・馬山市との交流 236
2. 多彩な交流事業等 …… 238
各地に広がる様似会 238
全国夫婦岩サミット 239
全国かたくりサミット 241
3. 行幸啓の記録 …… 241
第五節 広報・広聴活動 …… 243
広報と広報委員会 243
町政懇談会の開催とホームページの開設 245
第六節 自治会活動 …… 246
第二章 議　会 251
第一節 議員定数と議員 …… 251
議会の概要と役割 251
議会議員の定数 254
歴代議長及び議員 255
第二節 議会活動 …… 258

議会の審議　258
「議会だより」の発行　258
様似町議会の運営に関する基準　260
その他の活動　261
様似町長の不信任決議案　262

第三章　財　政　263

第一節　一般会計（決算）の推移……263
1．歳　入……264
バブル崩壊後の町財政　264
追い討ちをかけた「三位一体改革」　265
財政健全化へ向けて　272
2．歳　出……274
目的別歳出　274
性質別歳出　281
第二節　指標で見る財政の推移……286
財政力指数　288
実質収支比率　288
経常収支比率　289
起債制限比率　290
実質公債費比率　291
将来負担比率　292
第三節　特別会計と公営企業会計の推移　292
特別会計（決算）の推移　292
公営企業会計（決算）の推移　293

第四章　選　挙　302

第一節　選挙の執行……302
選挙管理委員会　302
選挙人名簿　303
投票率の向上を目指して　303
投票区の変遷　304
第二節　町の選挙……306
町長選挙　306
町議会議員選挙　307
第三節　北海道の選挙……308

北海道知事選挙 308
北海道議会議員選挙 309
第四節 国政選挙……310
衆議院議員選挙 310
参議院議員選挙 312
第五章 叙勲・表彰 314
第一節 叙勲と褒章……314
叙勲 314
褒章 318
第二節 町の顕彰……320
名誉町民 320
町表彰 321

第四編 産業

第一章 漁業 328
第一節 平成期の漁業概況……328
第二節 漁業（水産業）の振興……346
各種振興施策 346
タコ・ツブ・ウニ漁等 347
水産加工業 350

海藻類（コンブの増産等）　350
駆除事業　351
第三節　施設等の整備……355
1．漁港の整備……355
様似漁港　355
冬島漁港　357
鵜苫漁港　359
旭漁港　359
2．主要施設の整備事業……362
第四節　漁業協同組合……364
1．様似漁業協同組合と冬島漁業協同組合……364
2．漁業協同組合の合併……371
合併の背景　371
合併の経緯　373
3．日高中央漁業協同組合様似支所とえりも漁業協同組合冬島支所……374
新組織の概要　374
様似さけ定置網漁業生産組合の発足　379
日高無線漁業協同組合　379
日高昆布フォーラムの開催　380
第二章　農　業　382
第一節　農業の概況……382
需要に応じた作物転換　382
数値で見る様似町の農業　383
町の農業支援制度　386
第二節　農産物・畜産物……389
1．農業生産額の推移……389
2．耕作農業……390
稲　作　390
飼料作物　391
施設野菜（いちご）　391
3．農用地整備……395
4．畜　産……396
軽種馬　396
乳用牛・肉用牛　398

第三節 農業関係機関・団体……399
1. 農業委員会……399
2. ひだか東農業協同組合……400
組合の概況 400
組合員組織 402
第四節 鳥獣被害防止対策……404

第三章 林業 407

第一節 林業の概況……407
数値で見る林業 407
道有林と町有林 410
第二節 林業振興と保全事業……413
林業をめぐる内外の変化 413
様似町森林整備計画 414
林道の整備 415
第三節 林業関係団体……416
林業指導事務所 416
北海道林産物検査会 417
様似町森林組合 417
ひだか南森林組合の発足 418
日高森づくり協同組合（旧浦河地方林産協同組合） 421
森林愛護組合 422

第四章 商工業 423

第一節 商業……423
1. 商業の推移……423
商店街の形成 423
商業の概況 424
2. 商業振興策……428
地域振興券・さまに振興券 428
様似町地域商品券の発行 428
3. 商業関係団体……430
様似町商工会 430
4. 消費者行政……433

消費者行政のあゆみ　433
様似町消費者協会　434
5. 金融機関……435
日高信用金庫　435
北海道信用農業協同組合連合会　437
第二節　鉱工業・建設業……437
1. 鉱工業の概況……437
2. 建設業の概況……440
3. 主要な立地企業……441
東邦オリビン工業株式会社　日高事業所　441
新日本電工株式会社　日高事業所　443
日高エレクトロン株式会社　445
第五章　観光　446
第一節　様似町の観光施策……446
多彩な観光資源を生かす　446
様似八景の選定　447
ジオパークと観光振興　449
第二節　主な観光施設とイベント……450
1. 主な観光施設……450
アポイ山荘　450
アポイ岳ジオパークビジターセンター　453
親子岩ふれ愛ビーチ　453
2. 主なイベント……454
アポイの火まつり　454
北海道大凧まつり　455
さまにウニまつり　456
3. 観光入込客数の推移……457
第三節　観光関係団体……464
様似町観光協会　464
株式会社様似観光開発公社　464
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会　465

第五編　教育

第一章　教育行政　468

第一節　教育委員会……468
平成の教育概観　468
様似町教育委員会　469

第二節　町の主な教育施策……470
様似町教育大綱　470
教育施策　473

第二章　学校教育　477

第一節　小学校と中学校の変遷……477
様似町内の学校の変遷　477
小中一貫校制度の導入　480
「ふるさとアポイ学」の活動　481

第二節　小学校……484
様似小学校……484
鵜苫小学校――平成二十三年三月閉校……495
幌満小学校――平成十五年三月閉校……503

第三節　中学校……508
様似中学校……508

第四節　高等学校……515
様似高等学校――平成二十六年三月閉校……515

第五節　幼稚園……526

町立あすなろ幼稚園（町立幼児センター）……526
認定こども園「様似町立幼児センター」……529

第三章　社会教育　531

第一節　町の体制と関係機関……531
行政における社会教育の体制　531
社会教育委員　534
青少年問題協議会と青少年育成協議会　535
子ども会育成連絡協議会　537
住民アンケート　538

第二節　社会教育施設……540
社会教育施設　540

1．中央公民館……541
公民館の催し　542
公民館施設の今後　542

2．町立様似図書館……543
図書館の諸事業　544
子どもの読書活動推進計画　545
開館三〇周年記念ウイーク　547
図書館の課題　547

3．様似郷土館……549
郷土館の諸事業　550

4．カン・カン講座……552

第三節　社会教育団体……554

1．青年団体……554
青年団体略史　554
様似町青年団体協議会の目的と活動等　556
大会類への参加　556
様似町内での活動　557
運営予算　559

2．女性団体……560
女性団体略史　560
様似町女性団体連絡協議会（女性連）の役員構成と諸活動　561
運営予算　562
管内女性団体の解散　562

第六編 文化・スポーツ

第一章 文化 564

第一節 町の文化振興策……564
様似町文化振興条例 564
文化振興策 565

第二節 町の文化団体と活動……566
1. 様似文化協会……566
様似文化協会の概要 566
加盟団体の動向 567
運営予算 569
2. 加盟サークルの活動……570
3. 文化表彰……570

第三節 町の各種行事……577
様似町文化祭 577
日高管内芸術祭（日高管内道民芸術祭） 578
日高管内こども芸能祭 581
アポイ大盆踊り 582
アポイの火まつり 583
大凧まつり 583

第四節 様似の社寺……586
1. 神社……586
住吉神社 587
ガンビ龍神小祠 588
幌満川稲荷神社 589
2. 寺院、その他……590

様似町内の寺院 590
等澍院 591
蝦夷三官寺設置二〇〇年 591
蝦夷三官寺の一寺院として 592
その他の宗教施設 593

第二章 スポーツ 594

第一節 生涯スポーツの推進 594
1. スポーツ振興計画 594
様似町生涯スポーツ中期振興計画 594
2. スポーツ推進の具体化 595
体育指導員からスポーツ推進委員へ 595
スポーツ振興会とスポーツ推進審議会 596
町民スポーツの集い 597
スポーツ教室 598
道民スポーツ日高大会 600
スポーツ表彰 601
様似町スポーツ傷害見舞金条例 601
3. テニポン発祥の町 606
テニポンの特徴と普及 606
北海道テニポン協会 607
第二節 主なスポーツ施設 608
第三節 体育団体と活動 610
様似町体育協会から様似町スポーツ協会へ 610
協会加盟団体数と会員数 611
スポーツ少年団 612
第四節 町のスポーツ行事 614
町民運動会 615

第三章 文化財 618

第一節 様似町の埋蔵文化財 618
埋蔵文化財包蔵地 618
冬島遺跡 619
第二節 指定文化財 626

様似町内の指定文化財 626
国指定文化財 626
町指定有形文化財 629
第三節 様似山道 …… 633
蝦夷地の山道と様似山道 633
様似山道の開削 635
明治以降の様似山道 638
保存と活用 639
様似山道内の遺跡 642

第七編 社会福祉と保険

第一章 社会福祉 646

第一節 主な福祉団体と福祉施設 …… 646
様似町社会福祉協議会 646
日本赤十字社様似町分区 650
社会福祉法人様似福祉会 650
様似町保健福祉センター 651
第二節 高齢者福祉 …… 654
1. 主な福祉施策・計画 …… 654
高齢者福祉の変遷 654
様似町老人保健福祉計画 655
様似町高齢者保健福祉計画・第八期介護保険事業計画 658
2. 主な関係団体・施設 …… 660
老人クラブ 660

老人クラブ連合会　661
高齢者事業団　662
特別養護老人ホーム様似ソビラ荘　662
第三節　児童福祉・母子福祉……666
1．主な支援策・計画……666
児童手当の拡充　666
医療費助成制度　667
その他の支援　667
様似町次世代育成支援行動計画　668
様似町子ども・子育て支援事業計画　672
2．主な関係団体・施設……674
民生委員・児童委員　674
様似町立おおぞら保育園（さまに保育園）　676
第四節　障がい者福祉……680
1．主な福祉施策・計画……680
支援費制度　680
様似町障害福祉計画　682
2．主な関係団体……683
日高管内身体障害者福祉協会様似支部分会　683
第二章　社会保険と公的扶助　684
第一節　国民健康保険……684
国民健康保険制度の変遷　684
第二節　国民年金……687
第三節　介護保険……690
介護保険制度の概要　690
介護保険制度の見直し　693
第四節　生活保護……698

第八編 医療・保健・環境

第一章 医療と保健 702

第一節 医療……702
様似町内の医療機関 702
周辺地域との連携 704
医療技術者及び保健師等修学資金貸付制度 705

第二節 保健……705
1. 健康に生きるために……705
母子保健事業 705
各種健診・検診事業 706
2. 病気の予防……711
予防接種 711
新型コロナウイルス感染症 714
献血 715
3. 健康づくり施策と組織……715
健康づくり事業 715
保健師・助産師の活動 716
保健関係協力団体 716
保健所と保健センター 718

第二章 上下水道 719

第一節 上水道……719
上水道事業の推移 719
拡張工事 720
浄水施設 721

水道料金の改定　722
第二節　下水道……725
下水道事業の開始と整備概要　725
下水終末処理場　729
下水道受益者分担金制度　731
第三章　環境・衛生　733
第一節　ごみ処理……733
ごみ処理事業の沿革　733
様似町クリーンセンター　734
ごみの分別回収　738
第二節　し尿処理……742
し尿処理事業の沿革　742
浄化槽の活用　744
第三節　墓地・火葬場……746
墓地　746
様似町葬斎場　747

第九編　交通と情報通信

第一章　交通・運輸　750
第一節　道路……750
1．様似町の道路網……750
2．国道……751
国道三三六号　751
国道三三六号拡幅事業　752

路線改良とトンネルの開通 753
3. 道道 754
4. 町道 755
5. 除雪 765
第二節 橋梁・トンネル等 766
1. 橋梁 766
橋梁長寿命化修繕計画 766
国道及び道道に架かる橋梁 772
2. トンネル・覆道 772
様似町内のトンネル・覆道 772
塩釜トンネル 774
第三節 鉄道 774
日高本線と様似町 774
様似町内の駅 778
廃止の経緯 780
日高本線の廃止 783
第四節 その他の交通 786
1. 旅客自動車営業 786
ジェイ・アール北海道バス営業所 786
様似駅前バス待合所 789
ハイヤー、タクシー営業 790
2. 陸上貨物運送業 791
3. 海運業 791
第二章 情報通信 792
第一節 郵便 792
1. 郵政民営化の実現 792
2. 様似町内の郵便局 794
様似郵便局 794
幌満郵便局 795
鵜苫郵便局 796
様似本町郵便局 798
風景入り通信日付印 799
3. 郵便事業とその活動 800
郵便番号の七桁化 800
ふるさと絵はがきの発売 800

オリジナルフレーム切手シートの発売　801
地域見守り支援　802
第二節　情報社会への整備……804
1．電話・通信……804
市外局番の変更　804
携帯電話の利用拡大　805
インターネットの普及と高速通信への対応　806
高度無線環境整備推進事業　808
2．テレビ放送……809
難視聴対策　809
地上デジタル放送への転換　811

第十編　治安・防災

第一章　治安と法務　814
第一節　警　察……814
浦河警察署　814
様似町内の駐在所　815
第二節　防　犯……817
犯罪発生件数の推移　817
様似町防犯協会　818
社会を明るくする運動　818
様似町暴力団排除条例　819
第三節　保護司・各種委員等……821

保護司 821
人権擁護委員 821
調停委員 823

第二章 交通安全への取り組み 824

交通事故件数の推移 824
交通事故死ゼロを目指して 826
交通災害共済制度 827
様似町交通安全協会 828

第三章 防災 829

第一節 災害の記録 829

様似町の自然条件 829
平成以降の主な風水害 841
平成以降の主な地震 843
岩手県野田村への支援 846
海難事故への対応 847

第二節 防災・減災対策 848

様似町地域防災計画 848
津波浸水の想定 849
町民への啓発 851
防災関係協定 854
国民保護計画 857

第三節 消防と救急 859

1. 様似町消防団の活動 859

様似町消防のあゆみ 859
日高東部消防組合への編入 860
消防団員の推移 861
表彰の記録 865
火災の概況 865

2. 消防体制の充実 867

消防庁舎 867
資機材の拡充 868
通信・通報システム 871
消防応援協定 872
消防関係団体 872

3. 救　急……874
救急業務のあゆみ　874
救急出動件数と搬送人員　875
ドクターヘリの運用開始　875

年　表

年　表〔様似町の出来事／北海道及び国内外の出来事〕……880

編さん後記　◉様似町史編さん委員会委員長　川崎　正春……946
様似町史編さん委員会……948
監修協力者及び執筆者……949
主な参考文献……950
和暦（元号）・西暦対照表……957

凡例

一　本書は、既刊の『改訂 様似町史』（平成四年八月刊）並びに『新 様似町史』（平成五年九月刊）の続編として編さんした。

二　本書の原則的な記述範囲は、既刊町史に記載された平成二（一九九〇）年以降、令和二（二〇二〇）年までとした。ただし、記述範囲より過去の事実を記すことで歴史の理解が深まると思われる事項、及び既刊町史で触れられていない事項については、既刊町史との間に記述の空白が生じないよう、平成以前にさかのぼって記述すべく努めた。また、採録が可能であった一部事項については令和三（二〇二一）年以降の事項も記した。なお、巻末の「年表」については、既刊『新 様似町史』に平成五年一月までが採録されていることから、本書においては平成五年から起筆した。

三　文章（本文）の記述にあたっては、次のことを原則とした。

(1) 常用漢字及び現代仮名遣いを用いた。ただし、固有名詞、歴史用語、専門用語などについては必ずしもこの原則によらず、常用漢字の表外漢字や難読と思われる漢字には適宜ルビ（ふりがな）を付した。

(2) 年の表記は、国内の事項については和暦（元号）を用い、小見出しごとの初出に限り（　）内に

西暦を付した。ただし、元号をまたぎ期間の幅を示す場合は、「昭和六十（一九八五）～令和二（二〇二〇）年」のように両方の元号に西暦を付した。また、国外の事項については、西暦（和暦）の順とした。なお、本書巻末に明治時代以降の「和暦（元号）・西暦対照表」を掲載した。

(3) 人名の扱いは、個人情報に関わることであり、公表されている場合や公人の立場で使用する場合などに限定して掲載した。

(4) 敬称は、歴史書の慣用に倣い、原則として省略した。

(5) 歴代の各役職の氏名の後の（　）内に任期を示した。任期を示す年号は、明治を「明」、大正を「大」、昭和を「昭」、平成を「平」、令和を「令」と略記した。

(6) 本文中の数字は、原則として漢数字で表記した。世紀、年月日、年齢、条名（法律・条例等）、概数を示す漢数字に十・百の単位語を使用し、それ以外の統計数字等については十・百・千の単位語は用いず、万・億の単位語のみ使用した。なお、事業名や行事名等の固有名詞や引用文についてはそのままの使用を原則とした。

(7) 職業名や病名など、法令等により名称が変更されたものについては、変更の事由を尊重し、変更後の名称を用いて記述した（例＝記述当時の名称「成人病」→変更後の名称「生活習慣病」、「痴呆症」→「認知症」、「保健婦」→「保健師」、「看護婦」→「看護師」など）。

(8) 障がい者福祉に関する事項において、一般名詞については「障害」の文字を用いず「障がい」の表記を用いた。これは、「害」のもつ否定的なイメージを不快に思う人に配慮して平仮名で表記する動きが広がっていることを尊重したものである。ただし、「障害」の文字を用いている計画名・

事業名・団体名または法令等についてはそのまま表記した。このため、本書では「障がい」及び「障害」の表記が混在することとなっている。

(9) 人権意識に照らして使用に適していない語句について、記述する時代・時期に使われていた表現をそのまま用いている箇所があるが、これは史実に基づいた科学的歴史研究を進める立場からそのまま使用したものであり、これらの差別を容認するものではなく、その根絶を望むものである。

四 図表（統計表）については、次のことを原則とした。

(1) 資料出所名については図表ごとに付記した。ただし、図表に資料出所名が記されていないものは町の資料に拠った。

(2) 統計表中の符号は、次のとおりである。

「0」……単位未満のもの

「/」……該当数字がないもの

「－」……不詳または資料がないもの

「x」……該当数字があるが、統計法により公表を控えたもの

「　」（空欄）……原資料が空欄で、右のいずれに該当するか不明なもの

(3) 統計表の数字は、表によって、単位以下切り捨て、または四捨五入してある。したがって、総数と内訳の計が一致しない場合がある。

五 本書の執筆・編さんに際しては、種々の研究成果を参考とし、関係機関や市民団体等から提供を受けた資料・情報を有効に活用させていただいた。

第一編

様似町の全容

第一章　町の概要

第一節　位置と面積

位　　置

様似町は、北海道の中央南部に位置し、日高振興局管内の様似郡に属する。北海道を南北に貫く日高山脈の南西麓を町域とし、東側でえりも町、西側で浦河町（共に日高振興局管内）、北東側で広尾町（十勝総合振興局管内）と接し、南は太平洋に臨む。

町域の地理座標は、東経一四二度五一分四九秒～一四三度一二分一一秒、北緯四二度〇三分三九秒～四二度一五分三七秒であり、町役場は東経一四二度五六分〇二秒、北緯四二度〇七分四〇秒に位置する（**図表1-1-1**参照）。

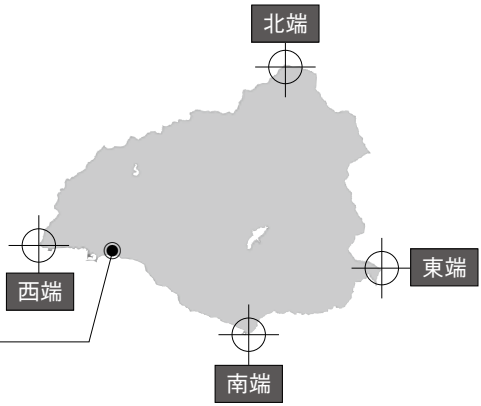
標高の観点から見ると、町域の北端（日高山脈南部の稜線上）が最高点（標高一三六五㍍）で、町の平均標高は一三四㍍、居住地の平均海抜は七〇・六㍍である。

また、道内各地から様似町への交通アクセスは、**図表1-1-2**のとおりである。

図表1–1–1　様似町の位置（令和２年10月現在）

面　　積		364.30㎢
幅と長さ		東西約20.2㎞
		南北約20.6㎞
海 岸 線		約24.2㎞
標高	役　　場	3.5m
	居住地の平均標高	70.6m

東端	東経143度12分11秒
	北緯42度06分15秒
西端	東経142度51分49秒
	北緯42度08分11秒
南端	東経143度04分04秒
	北緯42度03分39秒
北端	東経143度07分01秒
	北緯42度15分37秒



東経	142度56分02秒
北緯	42度07分40秒

資料：国土地理院

図表1–1–2　様似町への交通アクセス

道内各地（様似町までの距離）	交通機関	所要時間
札幌市から（約185㎞）	自動車	約３時間10分
	バ　ス	約３時間30分
新千歳空港から（約150㎞）	自動車	約２時間30分
	バ　ス	約３時間30分
苫小牧市から（約150㎞）	自動車	約２時間30分
	バ　ス	約３時間20分
とかち帯広空港から（約110㎞）	自動車	約１時間50分
帯広市から（約140㎞）	自動車	約２時間30分

資料：様似町ホームページ

面　　積

町域は東西約二〇・二キロメートル、南北約二〇・六キロメートル、面積は三六四・三〇平方キロメートルである。その広さは、日高振興局の七町の中では六番目、道内一七九市町村の中では九五番目であり、森町（渡島総合振興局管内）、池田町（十勝総合振興局管内）、増毛町（留萌振興局管内）、興部町（オホーツク総合振興局管内）とほぼ同面積である。

第二節　地　　形

1．地形の概要

様似町は、北海道中央部を縦断する日高山脈の南端と太平洋の海岸線の交点に位置する。

町域の大半を占めるのは日高山脈とその周辺の山々であり、海岸線付近にわずかな丘陵と河川沿

日高山脈とその山麓、丘陵、河川低地、海岸が織りなす変化に富んだ様似町の地形
（撮影：平成11年７月）

いに狭小な低地が広がり、ここが主な生活圏となっている。平地からは、東方にアポイ山塊、北方に日高山脈南部の主稜線を望むことができる。

中小の河川の主流は、おおよそ北東側の山岳及び丘陵から発して海岸線に向かって南西方向に流下して、太平洋に注いでいるが、主流に合流する支流には系統的な方向性は見られない。

海岸線は、様似地域より西では比較的単調であるが、様似地域に入るとにわかに変化に富み、浸食によってできた奇岩が海上にそびえる様似海岸や、アポイ岳の裾が海に接する海岸線には約六キロメートル続く海食崖が随所に発達し、日高耶馬溪（やばけい）と呼ばれる景勝地をつくり出している。

本稿は、様似町の地形を、河川、山地・丘陵、段丘地形、山麓緩斜面及び地すべり地形、海岸部に分類して記述するが、河川と海岸部以外の分類の記述にあたっては北海道立総合研究機構の研究成果「地質説明書」（巻末「主な参考文献」参照）を基礎資料として活用させてもらった。

2．河　　川

様似町の河川図を**図表１－１－３**に、水系別の一覧表を**図表１－１－４**に示した。

主要なものとして様似川、ニカンベツ川、幌満川、より規模の小さな水系としてルサキ川、鵜苫（うとま）川、海辺（うんべ）川、門別川、ポロサヌシベツ川、冬島川などがある。

主要河川

〈様似川〉

様似川は日高山脈に源を発し、多くの支流を集めて南下、新富を過ぎてから様似川低地を開き、岡田・田代地区の間を流れて、町中心部を経て太平洋に注ぐ。流路延長二二・三キロメートル、流域面積八三・六平方キロメートルの二級河川（北海道が管理する河川）である。河川の下刻に伴う浸食により、中・下流で狭い谷底低地を形成しているが、河口付近の河川勾配は緩やかである。下流域の水害防除を目的に、昭和五十（一九七五）年に字新富地先に様似ダムが整備された。

〈幌満川〉

幌満川は日高山脈の広尾岳（標高一二三一メートル）に源を発し、幌満湖（ダ

図表1–1–3　様似町の河川

ム湖）から幌満峡を経て南流し、日高耶馬溪付近の河口で太平洋に注ぐ。流路延長二四・八キロメートル、流域面積一五九・八平方キロメートルの二級河川である。

中流部にある新日本電工㈱の水力発電専用ダムである幌満川第三発電所ダムは、民間企業が所有するダムとしては国内最大級の貯水容量を誇り、現在は二カ所の水力発電所で約一万キロワットの電力供給を行っている。ダムは、かんらん岩体の北縁部に位置し、ダムより下流（南側）には幌満川がかんらん岩の分布地帯を削ってつくり出した幌満峡が約一〇キロメートルにわたって続き、ダムより上流（北側）では変成岩や深成岩などの地帯が広がり、地形が一変する。

図表1-1-4　様似町の水系一覧

水系	主流	支流・派川
様似川水系	様似川	オコタヌシ川、シンノスケシュンベツ川、ポンエサマンベツ川、タキナイ川、ソーエサマンベツ川、メナシュンベツ川、イサカナイ川、シャモマナイ川、アブサリ川、サルマップ川、サリナイ川 ほか
幌満川水系	幌満川	パンケ川、キリプネイ川、オピラルカオマップ川、フチミ川、オナルシベ川、古川
ニカンベツ川水系	ニカンベツ川	ポンニカンベツ川、右1号の川、キプチ川、ルベシュペ川 ほか
ルサキ川水系	ルサキ川	
ルランベツ川水系	ルランベツ川	
山中川水系	山中川	
オソスケウス川水系	オソスケウス川	
コトニ川水系	コトニ川	
冬島川水系	冬島川	
ポンサヌシベツ川水系	ポンサヌシベツ川	
ポロサヌシベツ川水系	ポロサヌシベツ川	
シミチカップ川水系	シミチカップ川	
門別川水系	門別川	ポンモンベツ川、ポンヒラウ川 ほか
カネカリウシナイ川水系	カネカリウシナイ川	
キリシタナイ川水系	キリシタナイ川	
海辺川水系	海辺川	ポンウンベ川 ほか
冬似川水系	冬似川	ポン冬似川 ほか
鵜苫川水系	鵜苫川	

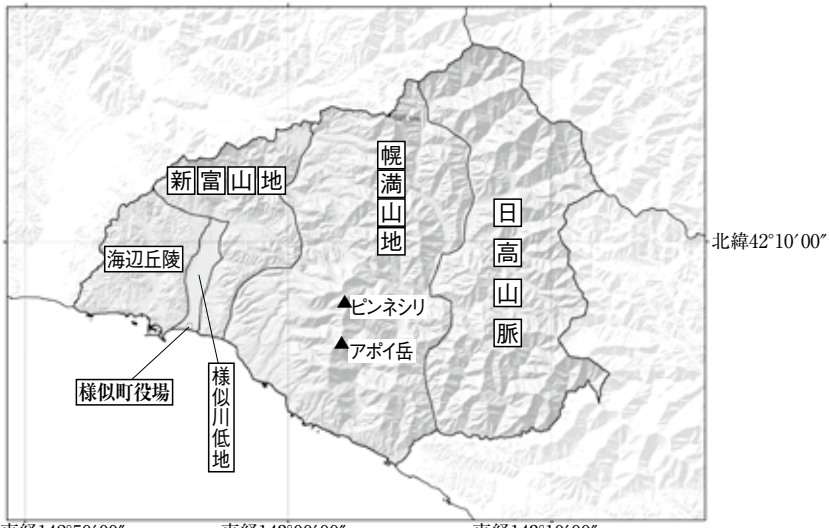
〈ニカンベツ川〉

様似町の東端近くの二観別岳（一〇〇五・七メートル）を源流として、えりも町との町境を画して南下した後、中流部で向きを西に変え、南流してくるポンニカンベツ川、右１号の川、ルベシュペ川などの支流と合流して、旭漁港近くに注ぐ。流路延長一三・四キロメートル、流域面積五三・六平方キロメートルの普通河川（町が管理する河川）である。中・下流では狭い谷底低地を形成するが、河口付近は河川勾配が緩やかで、河口から六キロメートルの地点で標高は八九メートルである。

3．山地・丘陵

本稿では、地形の険しさや高度分布などの特徴に基づいて、様似町内の地形を次の五つに区分する（**図表１-１-５**参照）。

図表1-1-5　様似町の地形概略図



資料：地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部 地質研究所「平成29年度受託研究報告書 アポイ岳ジオパークにおける地質図編（地質説明書）」（平成30年３月）を一部加工

① 日高山脈
② 幌満山地
③ 新富山地
④ 海辺（うんべ）丘陵
⑤ 様似川低地

日高山脈

日高山脈は、狩勝峠付近を北端、えりも町付近を南端とする南北約一四〇キロメートルに及ぶ山脈である。山脈北部の幌尻岳（標高二〇五二・四メートル）を最高峰とし、一八〇〇メートル超のピークが並ぶが、ペテガリ岳（一七三五・八メートル／新ひだか町静内高見）より南になると急速に高度を下げていく。浦河町と広尾町にまたがる楽古岳（らっこだけ）は標高一四七一・四メートルで、この楽古岳の南方一・五キロメートルにある標高一三六五メートルのジャンクションピーク（複数の方向から集まってくる尾根の合流地点にあるピーク）が、様似町内における最高点である。それ以南ではさらに標高を下げ、一〇〇〇～一二〇〇メートル前後のジャンクションピークなどが続き、それらをおおむね

鵜苫の海岸からアポイ岳を望む

六〇〇～一〇〇〇㍍程度の稜線がつないでいる。主稜線をなす尾根はやや幅広くなり、幌満川の上流では、しばしば緩斜面が発達している。日高山脈北部～中部に比べ、主稜線～稜線直下が斜面崩壊などにより裸地となることが少ないのが特徴である。

幌満山地

幌満山地は、アポイ岳（標高八一〇・五㍍）からピンネシリ（標高九五七・七㍍）へ北へ連なる山塊よりも東側を占める山域を指す。この山域は、標高数百㍍程度の比較的急峻な山地がその大半を占め、丘陵や低地は海岸線や河川沿いを除き、ごくわずかしか認められない。

山地の標高は海岸付近では二〇〇～四〇〇㍍程度だが、北東に向かって次第に標高が高くなり、日高山脈の主稜線に至る。ピンネシリからアポイ岳へと連なる稜線は標高七〇〇～九〇〇㍍と、周辺の山地に比べて抜きん出て高い。

新富山地

新富山地は、アポイ岳からピンネシリ及びその北方へ続く山塊から西側、門別川中流と様似ダムを結ぶ線から北側

錦栄橋付近から新富山地を望む

の山域を指す。この山域は、標高二〇〇～七〇〇㍍程度の緩やかな山地で構成されている。尾根は幅が狭いながらも平坦面となっており、面の標高は門別川中流から田代では標高二〇〇～二五〇㍍前後、北方へ向かって高度を上げ、さまに湖付近では四〇〇～五〇〇㍍、さらに北方では五〇〇～七〇〇㍍前後となる。山麓に緩やかな起伏の緩斜面が形成されていることが多く、その下方は段丘化している。

海辺丘陵

海浜丘陵は、様似川の西岸で、様似川の支流であるシャモマナイ川流域から浦河町上杵臼を結ぶ線よりも海側に分布する丘陵を指す。この地域は、標高一〇〇～二〇〇㍍前後のきわめて緩やかな丘陵地形で構成されている。丘陵の頂部には、幅一〇〇㍍から～数百㍍に及ぶ平坦面が発達している。平坦面の高さには定高性があり、大海辺付近で二〇〇㍍前後、海岸線付近で一〇〇㍍前後と、海側に向かって低下している。

西町～鵜苫沢にかけてと小海辺～大海辺にかけては、周

海辺丘陵（左手前はエンルム岬）

囲に比べて尾根の平坦面の高さが二〇～五〇メートル程度と低く、尾根から斜面に小さな沢が著しく発達している。また、この地域では、尾根が北西～南東方向に延びて分布する傾向がある。

低地に河川が注ぎ込む箇所では、低地と山地・丘陵の境界に小規模でやや急傾斜な扇状地が形成されている。

様似川低地

様似川低地は、様似川の中流から下流にかけて、幅五〇〇メートルから一キロメートルにわたって広がる平坦な低地である。標高は岡田付近で約二六メートル、旧様似駅（令和三〔二〇二一〕年四月廃止）付近で四・二メートルである。平地と山地・丘陵の境界には、低地からの高度差が数メートルから三〇メートル程度の段丘が断続的に認められ、様似川低地でも、低地に河川が注ぎ込む箇所では扇状地が多く形成されている。

海岸線沿いにはごく小規模ながら砂丘が形成されていることがある。顕著な砂丘は、様似町の西隣を流れる日高幌別川の河口に見られるが、様似町でも様似川の河口域、国

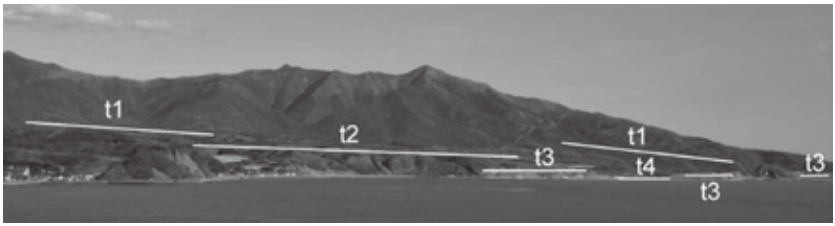
海岸部に市街地が広がる様似川低地

道三三六号の海岸側に高度差が数十センチメートルから一メートル前後の微高地として認められる。幌満川や鵜苫川河口にもごく小規模ながら見られる。旧様似駅付近にも高度差が数十センチメートルから一メートル以下の微高地が認められるが、市街化により地形が不明瞭となっており、詳細は不明である。

4．段丘地形

段丘は、過去に海や河川の水中で形成された平坦面がその後に水面から離れた地形であり、様似町では海岸線沿いと主要河川沿いに断片的に認められる。

海岸線に沿った段丘は、海水面の変動や地盤の隆起に伴い形成された「海岸段丘」と呼ばれ、様似町西部の鵜苫付近、また様似海岸から冬島及び幌満海岸にかけて見られる。五万分の一地質図幅説明書「幌泉（ほろいずみ）」（昭和三十一〔一九五六〕年刊）には、最高三〇〇メートルを超える高位の段丘から、二〇メートル以下の低位の段丘まで、全体で四段の段丘が記載されている。冬島からニカンベツ川河口にかけては、海岸線沿いの低地が存在しないか極端に狭かったため、これらの段丘面は比較的安全に歩行できる交通路として貴重であった。寛政十一（一七九九）年に江戸幕府が北方警備のために開削し



アポイ岳の南西山麓部から様似～幌満海岸にかけて広がる海岸段丘。全体で４段の段丘が見られる（様似町「アポイ岳ジオパーク――世界ジオパークネットワーク加盟申請書」より）

た様似山道（全長約六キロメートルの官道）は、この海食崖や緩斜面に道を開き、段丘面上の歩道と接続して陸路としたものである（「第六編 第三章 第三節」参照）。

河川沿いの段丘は、海水面の変動と山地・丘陵からの土砂の供給により形成され、「河岸段丘」と呼ばれる。各河川では、沖積低地よりも一段高い低位段丘面を除き、段丘面は狭小で、それほど発達はしていない。例外はアポイ岳南西麓及びニカンベツ川河口部であり、三段から五段の河岸段丘面が顕著に発達している。

冬似から鵜苫にかけては、海岸線に沿って標高四・五～五・〇メートル前後の平滑な面が形成されている。

5．山麓緩斜面及び地すべり地形

山麓緩斜面

山麓緩斜面とは、山地や丘陵が浸食される過程で、斜面の下部に形成される傾斜の緩やかな斜面のことであり、様似町内では、海辺川や様似川の中・上流、ニカンベツ川中流から幌満川中流で見られる。

様似川中流から海辺川中流にかけては、丘陵の頂部直下から低地（段丘面）にかけて比較的広く分布する。丘陵を構成する斜面も緩傾斜なため、山麓緩斜面との境界はしばしば不明瞭である。この地域には、風化により破砕した砂岩・泥岩と、凍結と融解の繰り返し（凍結融解作用）によって破砕された岩石が混じった土砂が広く分布しているため、緩斜面化したと思われる。

一方、ニカンベツ川中流から幌満川中流、さらに様似川上流にかけては、山地を構成する斜面の下部、地すべり滑落崖状の凹地の下部、河川の最上流部などに山麓緩斜面が散在している。これらは、凍結融解作用

により形成された緩斜面が残存しているもののほか、古い段丘面や、地すべりによって移動した土塊が斜面化したものも含まれていると思われる。

地すべり地形

地すべり地形は、様似川上流部、ニカンベツ川の中・上流部及びアポイ岳から幌満にかけて見られる。また、幌満川上流部にも、わずかだが、地すべり地形の可能性がある緩斜面が存在する。

様似川上流部の地すべり地形は、さまに湖の西方に広がる山地の南斜面（泥岩・砂岩の分布域）に集中している。地すべりによって移動した土塊の大きさはそれぞれ長径数百メートルに達するが、崖状の地形は必ずしも明瞭ではない。

アポイ岳から幌満にかけての地すべり地形は、山地の斜面に散在している。様似川上流部に比べて大規模なものは少なく、移動した土塊は長径一〇〇～二〇〇メートル程度以下のものが多い。

6．海岸部の地形

海岸部に目を向けると、鵜苫から様似漁港を経てエンルム岬まで、塩釜トンネルの大岩、ローソク岩、親子岩、ソビラ岩など、奇岩で知られる独特の海岸景観が続く。

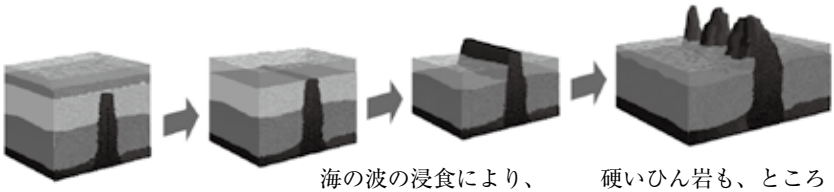
これらの奇岩は、約一七〇〇万年前、地殻変動によってできた地層の割れ目にマグマが入り込んでできた「ひん岩」と呼ばれる火山岩の一種がつくり出したものである。まわりの風化・浸食されやすい堆積岩の地

奇岩が並ぶ海岸景観

エンルム岬（波食棚が見られる）

親子岩

図表1–1–6　様似海岸における奇岩類の形成過程



地中深くから地層の割れ目にマグマが入り込み、冷えて硬いひん岩になる

海の波の浸食により、まわりの地層が削り取られ、硬いひん岩が残る

硬いひん岩も、ところどころ削られ、現在の姿になった

資料：様似町「様似の大地の物語（ジオ・ストーリー）」を一部加工

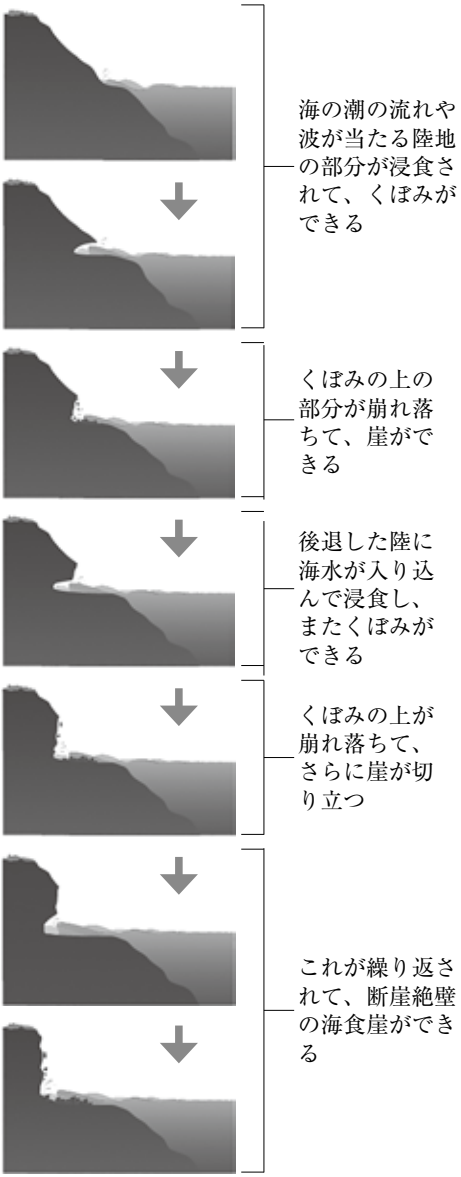
層が波や風で削り取られ、硬いひん岩だけが今の形で残ったと考えられている（**図表１-１-６**参照）。

エンルム岬の裏には、板状節理の切り立った崖と、干潮時に現れる波食棚が見られる。

また、アポイ岳の南、冬島から幌満にかけて、「日高耶馬溪」と呼ばれる約六キロメートル続く断崖絶壁の海岸がある。高さ一〇〇メートルに及ぶ切り立った崖は、長い歳月の間に波によって削られてできた海食崖である。

日高耶馬溪に代表されるこうした海食崖は、陸地が海によって直接浸食されることにより形成されたものである（**図表１-１-７**参照）。崖が海岸線に直接面しているということは、現在もこの海岸が堆積の場で

図表1-1-7　日高耶馬溪の形成過程



資料：様似町「様似の大地の物語（ジオ・ストーリー）」を一部加工

はなく、波浪による浸食で海岸線が後退し続けていることを示している。

この地域では、海岸段丘の高位のもののみが認められるが、これは、低位の海岸段丘が浸食により失われたことを物語る。

この海岸段丘上に様似山道が開削され、さらにトンネルや覆道により様似～襟裳間の海岸線沿いの交通路が確保されたことは前述したが、それまでここを通る旅人たちは、波が引く一瞬の間をねらって岩場を走り抜けたり、崖をよじ登るなどしなければならなかった。この海岸が、北海道の太平洋岸の中でも屈指の交通難所とされていたのは、これらの地形的特徴によるものである。

断崖絶壁が続く日高耶馬溪

第三節　気　候

様似町は太平洋に面しているため、海洋性気候で、気候区分では冷帯湿潤気候に属する。

図表１-１-８に、様似町の月別の気象状況を令和三（二〇二一）年のデータを用いて例示した。

また、**図表１-１-９**には、平成元（一九八九）年から令和三年までの三三年間の気象値を年ごとに示した。

秋から冬にかけて多少風や波は強くなるが、夏は涼しく、冬は雪が少なく、北海道内でも温暖な地域とされている。

令和三年の年間平均気温は九・〇℃で（平成元年以降三三年間の平均気温は八・

図表1-1-8　様似町の月別気象状況（令和３年）

区分／月	気温（℃）			降水量（㎜）	降雪の深さ合計（㎝）	日照時間（時間）
	平均	最高	最低			
1	-3.2	6.2	-11.0	47.5	100	116.7
2	-2.0	9.8	-10.3	51.5	40	130.5
3	3.2	12.1	-7.1	125.5	4	194.3
4	5.5	14.6	-2.0	154.0	1	231.2
5	10.3	19.4	3.3	140.5	－	177.5
6	15.1	24.3	7.7	108.5	－	223.1
7	19.8	30.7	13.4	67.5	－	170.5
8	20.5	31.1	11.9	88.5	－	193.0
9	17.3	24.4	10.6	196.0	－	198.2
10	12.3	22.3	0.9	93.5	－	164.8
11	8.1	16.3	-0.3	217.0	－	109.4
12	0.7	13.6	-10.4	64.0	11	113.0
	年平均 9.0℃			年合計 1,354.0㎜	年合計 156㎝	年合計 2,022.2時間

注：降水量は幌満観測所、その他は浦河測候所における数値
資料：様似町「令和３年度町勢要覧（資料編）」

風向・風速（m/秒）			日照時間（時）	雪（寒候年・cm）			大気現象		
平均風速	最大瞬間風速			降雪		最深積雪	雪日数（寒候年）	霧日数	雷日数
	風速	風向		合計	日合計の最大				
4.5	34.6	東南東	1742.5	64	13	15	90	61	10
4.4	35.4	西	1818.2	96	26	26	79	47	15
4.4	34.8	西北西	1843.3	164	28	46	73	47	8
4.2	32.4	西北西	1667.9	96	20	20	81	65	12
4.7	38.7	西北西	1710.9	78	9	12	90	44	9
4.7	37.2	西北西	1830.7	95	14	24	102	54	10
4.1	37.5	西	1706.9	149	22	32	88	70	20
4.5	33.3	西北西	1740.9	108	26	28	99	44	16
4.1	32.5	西北西	1731.5	102	15	18	97	79	16
4.3	34.6	西	1730.1	81	16	16	75	59	11
4.5	36.4	西	1914.1	74	9	11	105	52	11
4.4	44.9	西	1975.9	73	7	10	100	65	4
4.4	39.9	西北西	1898.5	60	6	9	105	66	9
4.2	44.7	東	1789.3	72	16	18	85	53	13
4.2	39.5	西	1805.1	73	9	13	93	60	7
4.4	42.7	西	1846.4	47	7	13	91	49	10
4.5	36.2	西	1867.8	96	19	26	103	61	10
4.6	39.6	西	1730	166	12	27	107	42	14
4.2	48	北東	1957.4	72	17	17	91	30	10
4.1	37.5	東南東	1837.1	77	12	12	84	52	17
4.3	31	西北西	1812.9	176	18	22	86	6]	5]
4.3	32.8	西	1640.5	139	20	23	97]	87	
4.2	31.7	西	1860.8	150	11	21	91	63	
4.2	39.5	西	1777.3	137	14	22	106]	77	
4.3	35.2	西	1788.6	177	19	18	116	64	
4.4	35.3	西南西	2120.5	107	10	20	103	49	
4.3	36.3	西	1894.3	129	16	16	96	67	
4.4	34.7	東南東	1999.9	103	7	12	95	47	
3.9	35.7	東南東	2019	150	19	25	103	54	
4	37.4	西	1713.4	150	17	19	121	56	
4.3	34.2	西	2067	168	18	21	104	47	
4	32	西	1896.1	40	7	9	87	50	
4.3	34.8	西	2022.2	164	36	34	95	45	

図表1–1–9　様似町における年ごとの気象値（主な要素）

区分／年	降水量（㎜）			気温（℃）			湿度（％）	
	合計	最大		平均	最高	最低	平均	最小
		日数	1時間					
平成元	1,177	99	38	8.4	31.2	−10.5	78	28
平成２	1,578	74	21	9.2	27.3	−12.2	78	27
平成３	993	89	20	8.4	27	−10.3	75	23
平成４	1,111	94	17	7.6	25.9	−10.1	77	27
平成５	1,282	94	20	7.5	25.7	−8.6	76	18
平成６	886	73	15	8.5	29.8	−12.3	75	20
平成７	1,472	95	32	8.1	26.1	−12.2	78	29
平成８	983	59	18	7.4	28.8	−13.4	77	12
平成９	1,253	118	20	8	26.6	−10.5	78	27
平成10	1,331	107	23	7.9	25.8	−14	79	23
平成11	1,112	85	23	8.7	28.4	−12.2	75	24
平成12	1,252	65	19	8.3	28.9	−13.5	76	29
平成13	1,055	76	24	7.2	25.8	−11.6	75	24
平成14	1,179	81	22	8	26.4	−10.5	77	21
平成15	1,334	167	26	7.7	23.8	−11.9	77	16
平成16	1,178	77	19	8.7	28.4	−8.7	77	21
平成17	1,083	68	26	7.9	28.3	−11	78	25
平成18	1,297	114	21	8.3	30.3	−10.8	78	13
平成19	1,071	64	17	8.7	28.7	−8.7	77	17
平成20	1,137.5	84.5	24	8.3	25.2	−11.8	80	9
平成21	1,659.5	113.5	25	8.3	25.8	−8.6	80	25
平成22	1,342.5	68	21.5	8.8	28.8	−12.5	78	24
平成23	1,252.5	114.5	46	8.3	27.9	−10.6	78	26
平成24	1,272.5	102	27.5	8.3	29.9	−13.8	79	25
平成25	1,207.5	117.5	32.5	8.2	27.4	−12.3	79	24
平成26	1,012.5	94.5	19	8.1	27.8	−12.4	77	21
平成27	1,098	103	17.5	9	27.8	−8.2	79	26
平成28	1,514.5	109.5]	33.5	8.5	29.1	−10.9	77	22
平成29	1,066.5	59	27	8	26.4	−13	78	25
平成30	1,328.5	64.5	28	8.5	27.5	−13.5	79	31
令和元	1,168	93	39.5	8.6	28.9	−13.9	78	20
令和２	965	55	22.5	9	30.3	−11.9	78	24
令和３	1,354	127	22.5]	9	31.1	−11	78	22

注１：降水量は幌満観測所、その他は浦河測候所の数値
注２：］は資料不足値、寒候年は前年８月から当年７月31日までの期間
資料：気象庁

三℃）、最も寒い月（一月）は零下三・二℃と北海道の他地域と比べてかなり高い。一方、最も暑い月（八月）では令和三年に三一・一℃が観測されているが、過去三三年間の最高気温の平均は二七・七℃にとどまり、三〇度を超えた年は四回しかない。これは、海洋に接しているため、冬季は厳しい放射冷却から逃れて気温が保たれる一方、夏季は千島海流（寒流）の上を吹き渡る海風が濃霧をもたらし、気温の上昇を妨げることによる。

また、過去三三年間の年間霧日数は平均五六日で、その多くは夏季に集中する傾向にある。また、最大風速一〇メートル以上の風が吹く日が一年の三分の一ほどある。

過去三三年間の年間降水量の平均は一二一二ミリメートルと少なめだが、夏にやや多い傾向がある。また、太平洋側のため冬期は降雪量が少なく、最深積雪は平均一九・八センチメートルである。

様似町における気象数値のランキングは**図表１－１－10**のとおりである。

夏に多く発生する海霧

図表1-1-10　様似町の気象ランキング

要素名／順位	1位	統計期間
日降水量	**210㎜**(1981年8月5日)	1978年7月1日～2022年6月1日
日最大１時間降水量	**46㎜**(2011年10月7日)	1978年7月1日～2022年6月1日
月降水量の多いほうから	**457㎜**(2016年8月)	1978年7月1日～2022年5月1日
月降水量の少ないほうから	**6㎜**（1989年2月）	1978年7月1日～2022年5月1日
日最高気温の高いほうから	**31.2℃**(1989年8月6日)	1927年1月1日～2022年6月1日
日最高気温の低いほうから	**−9.1℃**(1984年12月25日)	1927年1月1日～2022年6月1日
日最低気温の低いほうから	**−15.5℃**(1979年1月29日)	1927年1月1日～2022年6月1日
日最低気温の高いほうから	**24.5℃**(1950年8月5日)	1927年1月1日～2022年6月1日
日平均気温０℃未満寒候年間日数	**110日**（1984年）	1927寒候年～ 2022寒候年
日平均気温25℃以上年間日数	**5日**（2021年）	1927～2022年
日最高気温０℃未満寒候年間日数	**77日**（1945年）	1927寒候年～ 2022寒候年
日最高気温25℃以上年間日数	**38日**（1950年）	1927～2022年
日最高気温30℃以上年間日数	**2日**（2021年）	1927～2022年
日最低気温０℃未満寒候年間日数	**152日**（1944年）	1927寒候年～ 2022寒候年
日最低気温25℃以上年間日数	**0日**］（2022年）	1927～2022年
日最大風速・風向	**39.6m/秒　西北西** （1958年1月10日）	1927年1月1日～2022年6月1日
日最大瞬間風速・風向	**48.5m/秒　西北西** （1958年1月10日）	1949年7月1日～2022年6月1日
月間日照時間の多いほうから	**288時間**(2014年4月)	1927年1月1日～2022年6月1日
月間日照時間の少ないほうから	**48時間**（1941年8月）	1927年1月1日～2022年6月1日
年間日照時間の多いほうから	**2120.5時間**(2014年)	1927～2022年
年間日照時間の少ないほうから	**1552.1時間**(1932年)	1927～2022年
降雪の深さ日合計	**39㎝**(1975年1月17日)	1953年1月1日～2022年6月1日
降雪の深さ月合計	**100㎝**（2021年1月）	1953年1月1日～2022年6月1日
降雪の深さ寒候年合計	**182㎝**（1970年）	1953寒候年～ 2022寒候年
月最深積雪	**52㎝**(1928年1月7日)	1927年1月1日～2022年6月1日

注１：降水量は幌満観測所、その他は浦河測候所の数値
注２：］は資料不足値、寒候年は前年８月から当年７月31日までの期間
資料：気象庁

第四節　町の象徴

町　章

町章

大正七（一九一八）年四月一日に制定された（町章のカラー写真は**口絵**参照）。

町章のデザインは、太平洋に突き出した様似発祥の地「エンルム岬」を中心に置き、東に大港、西に小港を抱く姿をかたどった。さらに、様似町の産業が漁業と農林業の二つを柱とすることを表すとともに、二つが互いに相抱く形で大きな円に収まる様子に、和やかで平和な町であることの願いが込められている。

町　歌

昭和二十七（一九五二）年九月十五日に制定された。昭和二十七年は、町制施行の実現と開基一五〇年に当たる節目の年であり、その記念事業の一つとして町歌をつくろうという気運が高まり、同年九月十五日の記念式典の場で披露・制定された。

町歌は、郷土・様似の美しい風光を読み込み、町の一層の発展への願いと、心を結び合う町民の姿を高らかに歌い上げている（**図表１－１－11**参照）。

図表1-1-11　様似町歌

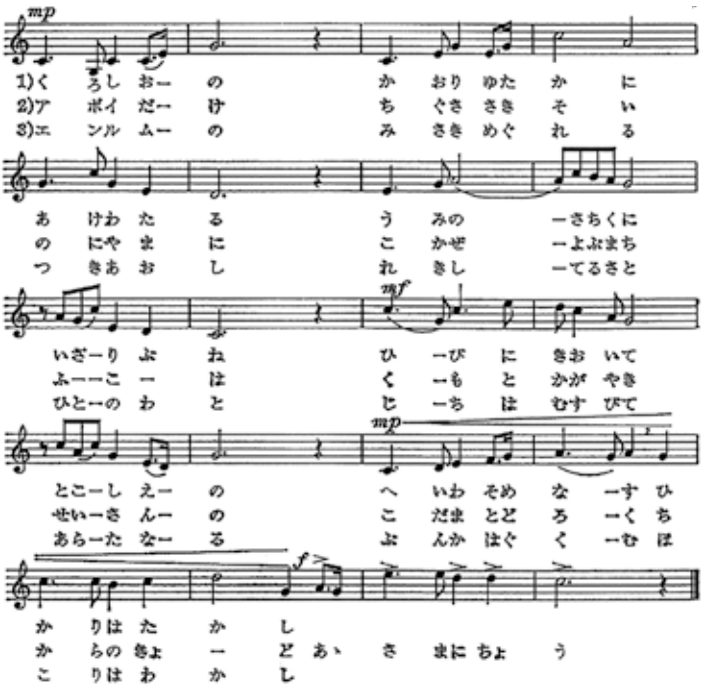
様似町歌

作詞＝小原　四郎
作曲＝西村直次郎

一、黒潮の　香りゆたかに
明けわたる　海の幸国
いざり舟　日々に勢いて
とこしえの　平和染めなす
光は高し　あゝ様似町

二、アポイ岳　千草咲きそい
野に山に　樹風呼ぶ町
風光は　雲とかがやき
生産の　こだまとどろく
力の郷土　あゝ様似町

三、エンルムの　岬めぐれる
月青し　歴史照る里
人の和と　自治は結びて
あらたなる　文化育くむ
誇は若し　あゝ様似町



町民憲章

町民憲章は、町民が活力あふれる生活を営むうえでの規範及び町政を推進するうえでの理念となるものであり、昭和五十七（一九八二）年十月一日に制定された。この年は町制施行三〇周年、開基一八〇年の節目の年であり、町はこれを契機に町民憲章を制定しようと、五十六年四月一日に「町民憲章起草委員会」を設置した。起草委員会は四次にわたる審議を通して原案をまとめ、五十六年十一月二十五日に「町民の意見を聞く会」で意見を集約した後、さらに審議を加え、十二月八日に町長に答申した。答申された町民憲章は同月二十二日、町議会での審議・議決を経て、町制施行三〇周年記念式典で公表・制定された。

様似町民憲章

わたくしたちは、アポイをあおぎ、くろ潮にきたえ育った様似町の町民です。
わたくしたちは、祖先の意志をうけついで強くはばたく、住みよい町をつくります。

一　仕事にはげみ、豊かな町にしましょう。
一　緑を育て、きれいな町にしましょう。
一　きまりを守り、住みよい町にしましょう。
一　夢があふれる、あかるい町にしましょう。
一　世界をつなぐ、文化の町にしましょう。

町の木・町の花

昭和五十七（一九八二）年の町制施行三〇周年、開基一八〇年を記念して、「町の木」、「町の花」を制定することが決定され、「町の木・町の花制定委員会」により選定が行われ、同年十月一日、町制施行三〇周年記念式典で制定・公表された。

制定委員会は、選定の基準として「開拓の昔から様似の発展の過程で、住民に親しまれ、いつくしまれた木と花」、「様似の風土に根ざした町の代表的な植生であり、町民が悠久に誇ることのできる木と花」を検討対象とし、町民アンケートも実施して熟議した結果、町の木に「日高五葉」、町の花に「ヒダカソウ」を選定、町長に答申した。答申した町の木と町の花は、町民憲章と同日に町議会で議決され、町制施行三〇周年記念式典で公表されたことは前述のとおりである。

〈町の木・日高五葉〉

町の木・日高五葉

幌満地区に自生しているものが日本における北限とされ、国の天然記念物に指定（昭和十八年八月二十四日）されている（「第六編　第三章　第二節」参照、カラー写真は**口絵**参照）。「五葉」は、一つのさやから五本の針葉が出ていることに由来する。町内の数多い樹種の中にあって、常緑樹であり、厳しい環境下でもたくましく生き抜き、その姿も優れていることから、「絶えない緑、伸びゆく様似」を象徴する樹木として、町民に広く愛されている。別名「キタゴヨウ」。

〈町の花・ヒダカソウ〉

町の花・ヒダカソウ

昭和三年に「日高様似アポイヌプリの植物」において初めて発表されたアポイ岳の固有種であり、様似町が悠久に誇れる花である（カラー写真は**口絵**参照）。開花は五月上旬から同月下旬で、可憐な純白の花を咲かせる。昭和六十年七月には「高山植物シリーズ」郵便切手の一種として発行された。

近年、ヒダカソウは減少が著しく、保全と再生のための取り組みが行われている。

⬅⬇郵便切手になったヒダカソウ

第二章　町の沿革――開町～昭和末期

近代以前のシヤマニ

様似町では先土器時代の遺跡は発見されていないが、太平洋沿岸と様似川流域を中心に縄文時代以降の遺跡が数多く確認されている（「第二編　第三章」参照）。縄文、続縄文、擦文（さつもん）時代の遺跡・遺物が発見される複合遺跡も多く存在しており、これらは現在の様似の地に太古から人々の営みがあったことを物語っている。

様似の地に多くの人が集まり、繁華な集落が形成されるようになったのは、江戸時代に入った寛永十二（一六三五）年、海辺川（西様似）の支流・ポロナイ川の水源にあった東金山（ひがしかなやま）の開削が始まった頃からといわれている。享保十六（一七三一）年に刊行された津軽藩の藩史『津軽一統志』には、寛文九（一六六九）年、シャクシャインの戦いが起きた時期、「松前より下狄地所付」として「うんへつ・しやはにう」の名が記されている。

当時の様似は、漁業を中心にした生活が営まれており、東接する幌泉郡とともにアプラコマ（油駒）場所の管轄となっていた。知行主は松前藩の蠣崎蔵人広樹（かきざきくろうど）とされている。天明六（一七八六）年には薬屋太平（太兵衛）が、寛政三（一七九一）年には浜屋久七が、同十一年には栖原（すはら）庄兵衛が場所請負人となり、アイヌの人々との間で、干だら・鮫（さめ）がら・魚油・鹿油・鹿皮・鯨・コンブ等の産物を取引していた。

寛政十一年に東蝦夷地が幕府直轄となった際、アプラコマ場所は、シヤマニ場所とホロイヅミ場所に二分

された。その境界は現在の字冬島にあったが、享和二（一八〇二）年にはニカンベツにまで広げられ、ウトマンベツ（鵜苫川）からニカンベツ（ニカンベツ川）までがシヤマニ場所で、シヤマニ（現・会所町）に幕府支配の会所が置かれたことから、会所を中心として繁栄するようになった。寛政十一年には、幕府により、プユカシマ（冬島）からホロマンベツ（幌満）の間に様似山道がつくられている。

享和二年、蝦夷奉行の管下となり、文化元（一八〇四）年には、オコタヌシに蝦夷三官寺の一つ歸嚮山厚澤寺等澍院が建立された。蝦夷地で死亡した和人の葬儀や法要など、信仰の拠点として建てられたものであるが、アイヌ民族を法要に招くなど、地域のアイヌ民族との交流もあった。

文政四（一八二一）年に、松前藩が復領すると、シヤマニ会所も松前藩に属したが、安政二（一八五五）年の再上知により、再び幕府領となり、安政六年から様似は仙台藩の警衛地となって、明治維新を迎えることとなる。

様似村の誕生

明治に入ると蝦夷地は「北海道」となり、道内に一一国八六郡が設けられた。日高国様似郡には、様似村、海辺村、桐橿村、傍平村、鵜苫村、平鵜村、門別村、染近村、白里村、核蕊村、冬島村、郡内村、嘯牛村、小宵村、島郡村、幌満村、岡田村、逢牛村、累地村、去魔村、二七村、農助村、誓内村が含まれた。

明治二（一八六九）年、様似郡は鹿児島藩の支配となるが、同年末には開拓使の直轄となり、同五年に浦河支庁、同七年に札幌本庁、同十二年に浦河外十郡役所の管轄となり、同十三年には各村に戸長役場が設置された。

明治十五年に開拓使が廃止されると、北海道は函館県・札幌県・根室県に区分され、様似町域は札幌県に属することとなった。また、村々の合併が行われ、様似・海辺・桐檀・傍平の四カ村は様似村、平鵜・門別・染近・白里・核蕊の五カ村は平鵜村、冬島・郡内・嘯牛・小宵の四カ村は冬島村、島郡・幌満両村は幌満村、岡田・逢牛・累地・去魔の四カ村は岡田村、二七・農助両村は二七村となった。

明治十九年に北海道庁が発足すると、浦河に「浦河十郡役所」が置かれ、その管轄下に入った。

明治三十年に浦河十郡役所が廃止されて浦河支庁が設置され、明治三十九年、様似郡様似村・鵜苫村・平鵜村・冬島村・幌満村・岡田村・二七村・誓内村の八村が合併して二級町村制が施行され、様似村が発足した。

開拓による農業の発展

様似は漁業によって開かれてきた土地であり、住民の多くは漁業のかたわら農耕を営んでいた。

江戸時代から続いてきた漁業では、サケやコンブ漁が行われていた。明治二十五（一八九二）年富山県からの漁業移住者が、川崎船（大型の和船）を使ってニシンの手繰網を開始し、次第に盛んになっていった。西部地域は沿岸漁業が主であったが、冬島を中心とする東部地域はコンブをはじめとする海藻類生産が主で、味もよい上質品が採れた。

一方、明治十八年に青森県から、ある一家が移住し、狩猟業の副業として農業を営んだのが、様似における定着農業の始まりとなった。その後、明治二十二年、海辺川流域に石川県輪島から数人が農民として移住し、同二十七年に富山県から二〇戸が二七村へ、同二十九年に福井・富山・青森各県から約一五戸が岡田・二七両村に入植した。その後、明治三十年代の終わりから四十年代にかけて新富に団体移住が行われている。

当時の農業は畑作が中心であったが、明治二十八年、様似川支流のアブサリ川流域で稲作が試作された。稲作の可能性としては一定の成果があったが、泥炭地が多かったことから、土地改良が必要であり、大正十一（一九二二）年、二七平鵜土功組合が設立されてから、本格的に稲作に転換されることとなり、様似村の農業が本格化していった。

江戸時代から続いてきた漁業と明治期から本格化した農業を中心に、様似村の発展が築かれていくことになった。

社会基盤や施設の整備

人々の移住に伴い、子弟への教育を求める声が高まり、明治二十一（一八八八）年、公立様似簡易小学校が創立、翌二十二年には冬島・鵜苫に分教場が設置され、教育施設が整備されるようになった。また、アイヌの子弟の教育の場として全道に二〇校つくられた小学校の一つとして、明治四十一年、道立岡田尋常小学校が設立された（昭和七〔一九三二〕年度廃止）（「第二編　第三章　第三節」参照）。

一方、道路の整備としては、明治二十四年、様似山道下（冬島～幌満）の海岸道路開削工事が着工したが、その工事は本格的なものではなかった。明治三十四年に開始された「北海道十か年計画」によって本格化し、同三十六年に様似市街を起点として冬島までの一貫した道路工事が始められ、大正十五（一九二六）年には町の西端である鵜苫から冬島までの新道が開かれた。

さらに昭和二年、コンクリートを使用した道路改良工事が始まり、幌満川には永久橋が架けられた。この道路は昭和三年、幌満郵便局を起点としてニカンベツ川まで延長、様似郡を貫通する国道となった。

また、昭和十二年には日高本線が様似駅まで開通し、鵜苫・西様似・様似の三駅が開業、海上交通では函館の商船会社が月五、六回（冬季は三、四回）の定期航路を開き、幌満へも寄港した。

一方で近代的産業の萌芽も見られた。日高地域に水力発電は必須と考えた手塚信吉が中心となって、幌満川に水力発電のためのダム建設を進め、昭和九年に幌満川水力電気㈱を設立、自家発電を利用してマンガン鉄の生産にも乗り出した。のちの東邦電化㈱（今日の新日本電工㈱）の誕生である。

戦時下の昭和十六年に村内の地名を再編、様似を「東様似」と「西様似」に分割したほか、二七は「田代」に、岡田と二七の一部を「新富」に、平鵜を「平宇」に改称し、誓内を「旭」と「大泉」に分割した。また、翌十七年、町の西南部の潮見台に役場庁舎を建設した。

新しい自治と様似町

昭和二十二（一九四七）年五月三日、「日本国憲法」とともに、「地方自治法」が施行され、民主主義の理念のもと、様似村長と村議会議員の選挙が執行された。新たなまちづくりの始まりである。

村は漁業の振興のため、戦前から進められていた漁港の整備を再開し、昭和二十一年に様似漁港、同二十三年に冬島漁港の工事に着工、同二十六年には上水道工事も開始した。

昭和二十七年四月一日、町制施行が実現し、様似町が発足した。町は昭和三十一年に、これからのまちづくりの指針となる「様似町総合振興計画」を策定し、計画に従ってまちづくりに取り組んだ。昭和三十六年には、町の区域を新たに設置、東様似を西町・潮見台・港町・本町・会所町・栄町・大通・錦町・緑町・朝日丘の各地区に再編、地番を改正した。また、昭和四十一年には、様似・冬島に次ぐ町内三番目の鵜苫築港

に着手し、昭和五十三年に完成した。

工業の分野では、昭和三十八年、東邦電化㈱と日本電気冶金㈱の合併により、日本電工㈱が発足、水力発電とともに日高工場は合金鉄専業の生産の拠点の一つとなった。また、東邦電化㈱からかんらん岩の加工技術や施設を譲り受け、昭和三十四年には東邦オリビン㈱（現・東邦オリビン工業㈱）が設立し、現在に至るまで町の鉱工業を支えている。

明治四十（一九〇七）年に二八四八人であった人口は、昭和三十年に一万人を突破した。しかし、高度経済成長による都市部への人口流出の波は様似町にも波及し、以後、人口は減少傾向に転じ、昭和四十五年には八八三四人となり、翌四十六年、「過疎地域対策緊急措置法」に基づく過疎地域指定を受けた。

一方、町民の生涯学習活動の基盤づくりにも力を入れ、昭和四十一年、日高で最初の本格的郷土館を建設、スポーツ事業については、町制施行とともに町民運動会が開催されるようになり、昭和五十八年九月には「生涯スポーツの町」を宣言した。昭和六十一年から「だれでも、どこでも」をテーマとした新しい生涯スポーツ種目として、テニスと卓球をミックスしたオリジナルスポーツ「テニポン」を考案し、広く受け入れられた。

また、大通地区に役場庁舎の移転を計画、昭和六十一年に保健センターを併設した役場庁舎を建設し、二十一世紀のまちづくりに向けて動き始めることとなる。

第三章　人口と土地利用

第一節　人口の推移

人口動態

様似町の世帯数及び人口の推移を**図表１-３-１**に示した。令和二(二〇二〇)年の総人口は四〇四三人で、最も多かった昭和三十（一九五五）年の一万一六三人と比較すると、約六一％減少した。減少率に着目すると、昭和三十年から同六十年までの三〇年間の減少率が二三・八％だったのに対し、平成二年以降の三〇年間では四三・五％減少、特に直近の一〇年間（平成二十二〔二〇一〇〕年～令和二〔二〇二〇〕年）の減少率は二〇・九％と、減少傾向に顕著な加速が見られる。

世帯数の推移に目を移すと、昭和三十年の一九〇〇世帯から昭和五十年代まで漸増傾向を示したが、昭和六十年以降は頭打ちから微減傾向に転じ、令和二年は一九一三世帯と、昭和三十年とほぼ同水準に戻っている。この間、総人口は一貫して減少を続けているため、世帯数の増加は、核家族化により世帯分離が進んだことを示し、一世帯当たりの人数の減少がそのことを裏付けている。ちなみに、令和二年における世帯の家

図表1–3–1　様似町の世帯数及び人口の推移　（単位：世帯、人）

区分／年	世帯数	人口			一世帯当たりの人数
		総数	男	女	
大正９	936	4,559	2,372	2,187	4.9
大正14	844	4,237	2,191	2,046	5.0
昭和５	918	4,743	2,455	2,288	5.2
昭和10	1,285	7,196	4,070	3,126	5.6
昭和15	1,415	7,703	4,111	3,592	5.4
昭和20	1,606	8,352	4,153	4,199	5.2
昭和25	1,693	9,132	4,644	4,488	5.4
昭和30	1,900	10,163	5,179	4,984	5.3
昭和35	2,087	9,900	5,012	4,888	4.7
昭和40	2,299	10,037	5,136	4,901	4.4
昭和45	2,288	8,834	4,305	4,529	3.9
昭和50	2,325	8,293	4,002	4,291	3.6
昭和55	2,513	7,986	3,889	4,097	3.2
昭和60	2,449	7,745	3,727	4,018	3.2
平成２	2,417	7,159	3,436	3,723	3.0
平成７	2,375	6,686	3,171	3,515	2.8
平成12	2,403	6,210	2,965	3,245	2.6
平成17	2,335	5,711	2,728	2,983	2.4
平成22	2,205	5,114	2,417	2,697	2.3
平成27	2,044	4,518	2,139	2,379	2.2
令和２	1,913	4,043	1,923	2,120	2.1

資料：国勢調査

族類型別構成比を見ると、夫婦のみの世帯が全体の三〇・六％、子どものいる世帯が二六・三％、核家族以外の世帯が七・七％、非親族を含む世帯が〇・〇一％、単独世帯が三五・四％となっている。

また、年齢階層別人口の推移を見ると、若年層人口の減少と高齢者（六十五歳以上）人口の増加が顕著であり、令和二年現在、十五歳未満の人口構成比は九・〇％（北海道平均一〇・七％、全国平均一一・九％）、十五～六十四歳の生産年齢人口は四八・七％（北海道平均五七・二％、全国平均五九・五％）、六十五歳以上は四二・三％（北海道平均三二・一％、全国平均二八・六％）となっている。

こうした少子高齢化は全国的な傾向であるが、様似町においては特に十五～三十九歳の若年層の減少傾向が長期にわたり続いている。これは、就職による町外への流出、また大学等への進学による都市部への流出が主な要因であるが、大学等の卒業後にそのまま都市部で就職するという経路が常態化していることが、若年層流出の固定化につながっていると考えられる。若年層の流出とUターンの困難さは、結果として結婚・出産の機会減少につながり、少子化傾向を一段と加速させる要因となっている。地元を離れた人材の還流を促すには、地元の雇用の受け皿の拡大が必須で、産業基盤の強化は様似町の大きな課題であり続けている。

今後は、若年層人口の社会減だけでなく、高齢者人口の自然減が加わり、人口減少は、いわゆる「第三段階」に突入していくことが見込まれている。

五歳階層別人口の推移

図表１-３-２は、様似町における人口を五歳刻みの階層別に示したものである。平成二（一九九〇）年は三十五～三十九歳が五四六人と最も多く、次いで五十五～五十九歳、十～十四歳と続き、いわゆる壮年期

（単位：人）

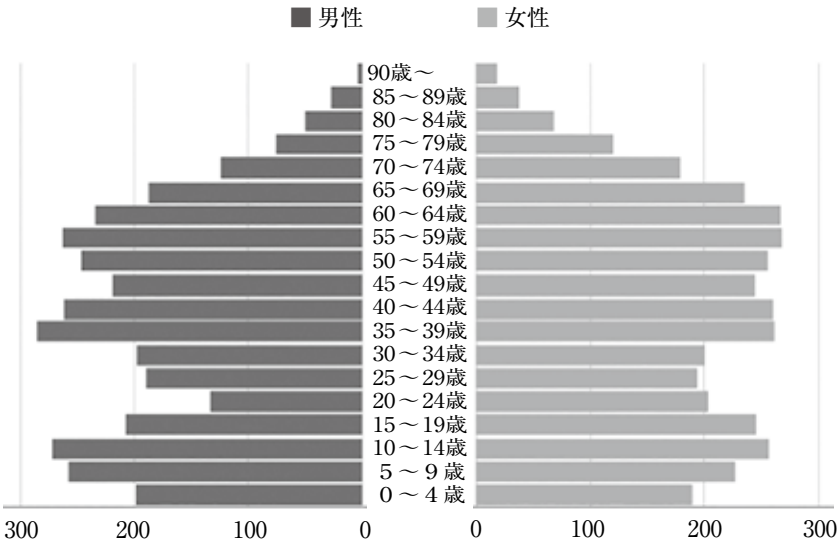
45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85歳以上	総数
463	502	530	500	422	303	195	118	87	7,159
219	247	263	234	187	124	75	50	32	3,436
244	255	267	266	235	179	120	68	55	3,723
509	440	484	462	476	376	259	142	117	6,686
258	201	243	215	211	160	102	53	45	3,171
251	239	241	247	265	216	157	89	72	3,515
533	504	408	440	430	428	318	183	129	6,210
274	264	179	215	195	179	129	69	42	2,965
259	240	229	225	235	249	189	114	87	3,245
350	519	491	380	410	383	367	250	165	5,711
174	263	252	169	198	173	141	92	55	2,729
176	256	239	211	212	210	226	158	110	2,982
310	340	491	443	355	377	329	270	245	5,114
162	164	254	216	157	177	147	89	68	2,417
148	176	237	227	198	200	182	181	177	2,697
269	294	322	457	437	319	321	263	295	4,516
128	143	153	229	215	139	144	105	80	2,137
141	151	169	228	222	180	177	158	215	2,379
263	276	275	293	438	399	277	265	331	4,043
136	137	125	135	219	197	115	120	103	1,923
127	139	150	158	219	202	162	145	228	2,120

図表1–3–2　様似町の５歳階層別人口の推移

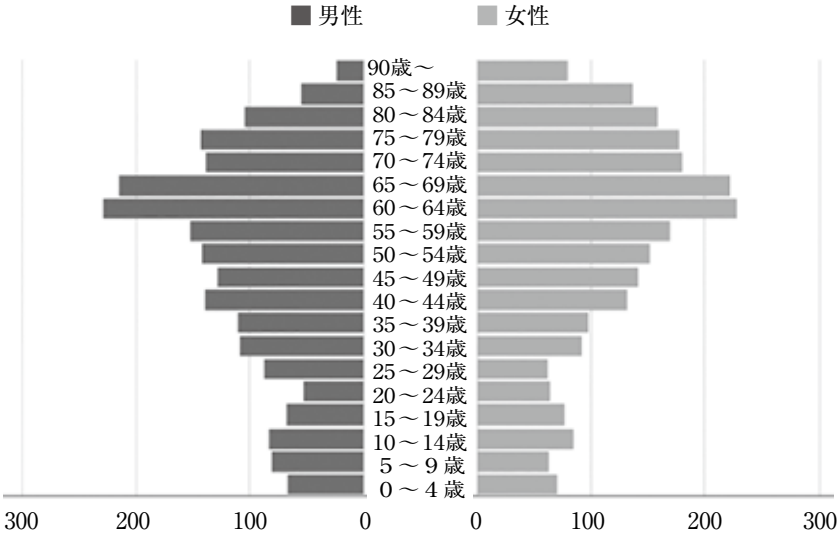
年 ＼ 年齢		0～4歳	5～9歳	10～14歳	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳
平成２	総数	388	485	528	453	337	382	398	546	522
	男	199	258	272	208	134	189	198	285	262
	女	189	227	256	245	203	193	200	261	260
平成７	総数	292	377	482	381	314	319	348	375	533
	男	142	200	249	175	146	149	171	182	269
	女	150	177	233	206	168	170	177	193	264
平成12	総数	248	284	359	344	252	331	326	331	362
	男	120	141	191	174	122	170	155	166	180
	女	128	143	168	170	130	161	171	165	182
平成17	総数	197	241	259	262	211	263	316	317	330
	男	103	122	127	129	112	133	157	157	172
	女	94	119	132	133	99	130	159	160	158
平成22	総数	171	192	226	168	140	209	247	306	295
	男	86	100	116	77	73	112	127	155	137
	女	85	92	110	91	67	97	120	151	158
平成27	総数	137	144	168	144	117	150	200	208	271
	男	67	81	84	68	53	88	109	111	140
	女	70	63	84	76	64	62	91	97	131
令和２	総数	107	117	139	122	91	120	143	190	197
	男	52	58	75	60	47	57	73	106	108
	女	55	59	64	62	44	63	70	84	89

資料：国勢調査

図表1–3–3　平成２年の様似町の人口ピラミッド



図表1–3–4　平成27年の様似町の人口ピラミッド



人口と年少人口が厚い安定的な人口構成であった。これを人口ピラミッドで見ると、ビア樽型の構造となっていた（**図表１-３-３**参照）。

ところが、二五年後の平成二十七年になると、かつて厚かった壮年期人口がそのまま高齢者人口にスライドするとともに、平均寿命の延伸によって後期高齢者（七十五歳以上）人口の厚みが増し、一方、少子化が顕著に進んだ。平成二年に多かった〇歳から十四歳の年少人口（一四〇一人）は、平成二十七年には二十五歳から三十九歳になったわけだが、この層の人口は五五八人にとどまり、転入人口を除外して単純に計算すると、約六割が流出したことになる。この結果、平成二十七年の人口ピラミッドは、上部が厚く下部が薄い壺型に変わった（**図表１-３-４**参照）。二つの人口ピラミッドは、わずか二五年の間に起きた人口構造の変化の大きさをを如実に物語っている。

第二節　土地利用

令和三（二〇二一）年度の土地利用の状況を見ると、山林が九〇・三％と圧倒的に多く、畑が二・五％、原野が一・九％、宅地が〇・五％と続く（**図表１-３-５**参照）。

宅地は、様似川が開いた中心市街地をはじめ、海岸沿いの鵜苫、平宇、冬島、幌満、旭の各地区に点在している。近年は、市街地近郊の原野等でも宅地化が徐々に進んでいる。

畑や牧場等の農用地は、様似川及び海辺（うんべ）川流域の平坦地や丘陵地の一部に開かれ、水稲、施設野菜、軽種

馬、酪農、肉用牛を中心とした農業経営が行われている。様似川周辺の丘陵地が牧場として利用されているのは、斜面の傾斜が緩やかであるのに加え、風化により地表部が岩石の破片で覆われているため、水はけがよく放牧に適していること、さらに丘陵の緩斜面は水を得やすい谷底低地へとつながっているため、谷底低地に畜舎や給餌施設を設置するのに好適なためである。様似川上流のポンエサマンベツ付近の地形的特徴も同様で、放牧場として利用されている。

町内の山林は、面積の約六割が道有林、約一割が町有林、約三割が私有林となっており（詳しくは「第四編 第三章 第一節」参照）、森林資源の保護・育成及び森林機能の保全が進められている。

土地利用は、土地の諸条件（地質、地形、気候、植生、土壌など）に応じて最適化が図られ、たとえば冬島、平宇、幌満などの段丘面を有する地域では、高台にコンブの干場が多く形成されている。様似町のコンブは、全国的に知名度の高い日高昆布の中でも質量ともに上位の評価を受けており、町の漁獲高の約三割を占める水産業の稼ぎ頭である。コンブは、採取後に適切に乾燥させることが重要で、そのため風通しと日当たりのよい平坦な広場を必要とする。海岸線に沿った沖積低地があれば、そこが干場の最適地となるが、様似町の海岸低地は狭いうえ居住地区ともなっており、必ずしも適さない。一方、冬島、平宇、幌満は海成段丘及び海岸線に近い河成段丘であり、西側が開けているために風通しがよく、干場として最適の条件を有している。

図表1–3–5　様似町の地目別面積

（令和３年度）

地目	面積（㎢）	割合（%）
田	0.95	0.3
畑	9.23	2.5
宅　地	1.83	0.5
山　林	329.00	90.3
牧　場	0.98	0.3
原　野	6.84	1.9
雑種地	1.51	0.4
その他	13.99	3.8
総　数	364.33	100.0

資料：様似町税務町民課